

天うつ浪

積しきが中の絶えて久しくして相會ひたるに、痛飲快談して歸るを忘る、日芳を、幾度か羽勝の促し立て、漸くに二人の暇を告げし時は、日は既に暮れ果て、一時間餘も經たり

お濱お鍋は後片付に忙しく、水野は獨り机に憑つて酔を吐きつ、飲み慣れぬ酒に聊か苦みて、■に微温き茶に■を癒しながら、羽勝が言ひたる海上の生活の如何に興味あるべきかを想ひ遣り、或は又翻つて日方が我を撲ちたる時の勢の烈しかりしことなどを思ひ廻らす折しも、日方が引き出し散らしたる我■記は我が膝近くありて、其の裏面に我が落書したる萬葉の幾首の歌の、横に、縦に、逆さまになりて我を慰むるが如きが偶然眼に入りたり。

唐討は好みて誦すれども和歌には疎き日方の、いづれも此は古き歌なるを知らで、我が詠じたるもの、やうに思ひ込みて我を扇りしが、言ひ解かんでも煩ければ其儘に冤罪を負ひたる、其事も思へは何か厭はしかるべきや、歌は皆他の歌ながら、詠まれたる思は我が思なるをと、凝然と見入りつ、文字を辿りて、久方の天つみ空に照れる日の亡せなん日こそ我が戀止まめ、と心の中に自ら讀みたり。

酔に我が心は蒸さる、が如くにして、身の筋は弛み骨節は和いて快く■きやうなるに、精神は何にか憧る、空に浮きて止まず、たゞく我を笑ますに足るものを得て、面白く破顔して算みたきやうの氣のする水野は、明らかに此を酒のさする事と知りながら、頒我が心の自然と動くに任せて、何とせん念慮も無く恍然となり居たり。

珍らしくも水野の面は暖げに微紅色に、其眼は優しき光を■へたれど、例の癖の物思に耽れるかと見えて身動きもせざるに、此方に入り來れる吉右衛門は

「御酒の後ですから御考へ事は毒です。些御話でもなさいますんか。日方さんと仰ある方は結構な方ですが、軍人で在らつしやるだけに荒い方ですネしかし羽勝さんと仰ある方でも彼の方でも、皆心底から貴下を思つて居らつしやる、眞實に結構な好い方々です。御氣に入らない事も仰あつて、しやうが、何す

彼も皆御親切から出た事ですか、御氣に御止めなすつて悪くなんぞ御考へなさらぬが宜うございます。」と言ひたり。

古右衛門は水野が身動きもせで物を思へるを、胸の中に羽勝日方が振舞言語を忘れ兼ねて繰り返し繰り返せると猜したるなすが、かく云はれて水野は我に復りてハツと驚きぬ。實に我は今此老人が言へるが如くに、羽勝日方の我に與へたる數々の言葉に就いて物をこそ思ふべき筈なるに、我は今抑何をか思ひ居し羽勝が言ひし海の上の生活に就いて歟。あらず、海の上などの事は既に思はざりき。日方が我に加へし鐵拳に就いてか。あらず、日方が事などは既に忘れ居たりき。我は我が胸の中に何を思ひ居たりしや我は今日日方に逢はず羽勝に逢はざりし前、大士堂前に圖らず相會ひたる彼の物優しきお龍を思ひ居たりなり。如何なる人の憐みをも惹かんとも思はざりし愚なる此の我がために、我が思へる五十子の病の疾く癒れかすと、日々歩を運びて祈りて呉れしといふ優しくも優しき彼のお龍をば思ひ居たりしなり。其の親しき友なりといふ驚くべき美人は既に三十に近かるべきながら人を驚かす美人の、扮装も極めて立派なりしおとうとやらいへるより、お龍が悲しき身の上を臆氣に聞きて、終に堪へ得で、我はを澱ぎて泣きたりしが、其憐れなるお龍をのみ思ひ居たりしなり。美はしく清かりし戀の誠の、人の爲りに情無く廢りて、狂ひに狂ひ、悲みに悲みたる末の其の女の、苦しき思ひに疲る、我を憐れと見て、猶有ム餘る優しき情を傾けて我に寄せくる、其の行爲はかりに樂無も今の自己を自ら慰むるといふ薄命のお龍をのみ思ひ居たりしなり。我は我が迷ひて泣き、苦みて悶えたる心の闇に、優しき光の線を投げ呉る、星を認めし心地して、我が其人に會ひしをば満心に悦び愉びつ、我が懐しきお龍をのみ思ひ居たりしなり

其一

思はんともせずして思ひ居たるは、心の其に染みたればなるべし。されども吉右衛門に話し掛けられて、水野は忽ち覺めたる如く、

『悪く思ふなんぞといふ考が何様して私に……。羽勝だつて口

方だつて皆私の兄同様なのだもの、何を言はれたつて悪く取つたり氣に仕たりするやうな事は有りは仕ないので。私は今ただ■然として居たところでした。いや今日は大■御世話でしたお蔭で一同悦んで歸りましたが、あれを残らず御厄介になる理由はありませんから、せめて御酒だけでも私の分にして、と云ひ掛くるを主人は悦ばぬ氣なる顔して、

■『また水野さんの他人行儀がはじまつた。几帳面過ぎて厭氣がさします。宜いぢやありませんか些細の事ですもの。』
と打消しつ、

『それは左様と先刻老夫が高田さんに逢ひましたら、水野さノに一寸來て貰ひたいことがあるから然様云つて呉れ、他人の居ない時會ひたいから成るべくば今夜あたり、といふ御談でございました。御洒氣は大分御有んなさるけれども、貴下の事ですから宜うございませう。更けない中一寸行つて居らつしやいませんか。』
と云ひ出したり。

高田は我が職を奉ずる學校の長にして、吉右衛門とも心易き里なれば、水野は更に考ふるまでも無くして、

『何だかさつぱり分らないけれども、其様なら一寸行つて來ませう。』

と答へつ、吉右衛門がお濱を呼び立て、提灯をと云ふを、それにも及ばずと制め、たゞ緩に帶締め直し、のみにて立出でたり。

同田が家は學校の直後面にて、農家造りにてこそはあらね、趣外も無き平々凡々の住居なるが、主人も其家に相應しき平々■々の、何の奇處も無き五十男にて、農夫にてこそはあらね、而白味も無き氣の小なる謹直三昧の人なり

半白の髪の毛は割合に多かれども、光澤無く黄色に■せきつたる顔の、口の傍の條文、額の皺など目立つて深く、光無き小さな眼、骨立つて高き鼻、おちつきの無き起居動作、活氣の無も物の言ひぶり、すべての乾燥びたる状態は、如何にも能く此人の、『人の子を誤るが如き強き人』ならで、一決して人の子を害はぬ古りたる教育家』たる事をば現し示せり。

高田は今水野の來り訪ふに會ひて、一昨日も昨日も會ひたる同士なるに、三年四年も隔て、面を見たるもの、如く、恐慙に時候の挨拶など管々しく仕て、三十匁ばかりの廉價茶を事々しノ湯を冷ましなどして入れ、隠れ簍、隠れ笠、打出の槌なんどの
■盡しを描きたる水金の光り爛々とする菓子鉢に、三月も前より盛られし儘かと想はる、やうなる最中の月の淋しげに干縮りたるを、

「何様ぞ詰らんものですが御摘みなすつて。

と円噲に薦め、何時用事を云ひ出すべき氣色も無く、興も無き世の噂、他所の事をのみ、熱心も無く氣■も無く、温和に冷静に打語りたり。

水野も初は護み居しが、終に堪へ得ずして口を開き

『山路の老人に御言傳でしたので出ましたのですが、御用を何様か伺ひたいもので。』

と促すが如くに云ひ出づれば

「イヤー、何様もハヤ詰らん事で、

と■落らしく右の手を上げて頭髮を撫でしが、やがて然もく決心したりといふやうに眞面目になつて自己が膝を見詰め

『水野さん決して御怒りなすつてはいけませんよ。萬已むを得んから是非無く御話しを致しますがネ。これも小生の地位か■致しまして詮方が無いので、何様か悪からず御解釋を願ひま■のです。實は下の御評判が甚だ思はしくないので。イヤ小生は何所までも貴下を信じて居りますから、他が何と申して■關ひませんが、何様も種々の事を申しまするので。ハ、世間といふものは煩いものでしてナア、信仰の自由といふ事は嚴然と許されて居りますのに、貴下の事を妄信に陥つたの何のと申しましてナ、其は又斯様いふ理由からだの彼様いふ仔細からだのと下らん事を云ひましてナ、それで何様も兎角小生の耳「煩い事が入ります。就きましては小生が考へまするには、■下も其ては生徒の父兄の手前や何ぞ、どうも教職を御執りなかり難いやうな譯ですから、一應此村の校の方を御退きなすつて頂いて、他の校へ行つて頂いた方が貴下の御利益で、又延いては校の爲にも聊か利益かと勘考致しましたです。御轉校の事は

貴下の御不都合にならんやうに、必ず小生が取計らひまするか
ら。』

と、辛くして云ひ出したる其の眞意は、我をして職を辭さし
んといふことなりけり

高田は重大の事と思へるなるべし、水野は斯ばかりの事かと玉
より軽く思ひて、

『解りました。早速御諭しの通りに致しましやう。』

■と心易く答ふれば、高田はホツト息をつける様なり

其三

我が職務を■む意などは露ばかりも有らざりしが、もとより。

生を其任に委ねんとも思はざりしなれば、水野は難る色も無く
蟬を辭せんと云へるに、高田は我が意の通りたるより胸は安
せしもの、却つて又相手の餘りに未練氣無きに薄氣味悪く、

■念らしく小き眼を瞬きて水野を見居たり

『しかし水野さん決して御不快に御思ひなすつてはいけません
何様か感情を害して下さいから、貴下に校から離れて頂きたい心
貨下を信じて居るのですから、貴下に校から離れて頂きたい心
は更に無いのでして、長く貴下と圓滿な御交際を繼續いで参り
たいのです。貴下は失禮ながら學力は御有りなさるし、なかな
ル長く小學の教師などを仕て居らつしやる御仁では無いのです
か、差當つて校の方を離れて戴いては御困りでもございませぬ
っから、小生は小生の費下に對する眞情を表して、貴下を他所
の校へ御周旋致しましやうと存じて居ります。何様か小生が書
下に對する敬意を御汲み取り下さつて頂きたいもので

、是もまた三十匁の茶を入れる、に湯を冷まして後にするが加
く町瞭に言へば、水野は他に■まれじ恨まれじとする心遣ひの
いと明らかに見ゆる此の半白の教育家を、憫然に思ふやうの情
も起りて、

「はい、有り難うございます。御高情はまことに有り難うご

います。御言葉に甘えまして何處かへ御周旋を願はなくつては
ならんのですが、しかし小生は何様も教鞭を執るには適せん■
うに思ひますから、差當つて他所の校へ参りたいとも存じま
んです。御厚意は何處までも有り難く存じますけれども、當分

は遊んで見たいと思つて居ります。それでは辭表は明日早速差し出しますから、何分宜しく御計らひを願ひまする。」と、飽まで謙退して柔和に應へたり。

水野が面に怨氣をも盛らずして、平常の如く何氣なき言の調子に職を辭せんといふを聞き、高田はやうやく荷を下したる心地してか、

『や、それでは當分御遊びも宜しうございませう。疾から小生は貴下を目して、蛟龍永く池中のものたらずと申して居りましたのです。ハ、。何様か今後何分御見棄無く御交際を願ひまする。』

と可笑くも無きところに磊落めかして妙に笑つて、最後には改めて肱を張つて堅くろしく頭を下げて一禮すれば、水野も是非なく禮を返して、

『いや今後の御交際は小生の方からこそ願ふべきで。では今日はこれで失禮致します。』
と恐慙に挨拶して辭し歸りたり。

區々たる職と些々たる俸給とは、之を得るも之を失ふも一顰笑にだに値せずと、水野は其事を繰り返しても思はず、たゞ婦微に残れる酔を吹く風の薄寒きを覺えつ、歸り着けば、お濱け待ち兼ねしが如く飛で出で、茶の間に迎入る、や否や、満面に笑を輝かしつ、他人には何言ふ間をも與へずして、

『今先生と入れ違つてネ、彼の尾竹が變に威張つて遣つて來ましてネ。とう／＼此方のものに仕た、もう大丈夫だ、もう屹度保證ひます、もう宜うございます、もう是からは快癒るばかりです、必ず五十子さんは本復するといふ見込みが立ちました。水野さんに十分悦んで貰はなくちやあ、と云つて今まで饒舌へて行きましたよ。嬉しいのネエ先生。妾嬉しくつて。ほんしに妾嬉しくつて。』

と急に急きて喜悦の音信を傳へたり。

お濱は我が此の言葉を聞くと齊しく水野の如何に悦びて笑むならんと思ひ設けつ、心樂みにして水野の面を差覗けるに、悦び極まつてか其人は笑まず、目のあたりに神佛をも拜めるが如き、敬みに敬めるが中に和しき兒ゆる面になつて、抑々何をか見詰

むるや頭を斜に、物も無き空中を凝然と仰ぎたるが、見る／＼動かざる其の眼の中よりは、汗々漢々として**二**の溢れたり。**二**び**二**とはこれなるべきにや。

其四

二相良にも尾竹にも回復の望無しとこそは言はれざりつれ、十に六七までは危く思はれたるらしき徴には、變状さへ無くば、變状さへ無くばと、遁路のある保證の仕方を爲れたる、其の重き病に悩みし人の、今は必ず癒るべしとは眞實の事なりや、覺めての後の口惜しかるべき夢の中の果敢無き悦びにはあらざるや。あゝ、夢にはあらず、確に現なり、虚妄にはあらず、確け眞實なり。かつては人の運命の頼み無きを悲みて、訴ふる方無き我が思の、空しく流水に描く文字となつて消ゆべきかを歎きしも、今は天地の間に愛情有り道義有つて、神明佛陀の慈惑の御皆は人間の上を離れず、愛護の御手は一切の衆生を攝取して捨てざらんと仕玉へることを思ひ奉り、愚しき一念の誠を籠めて、他人には言へぬ心中の秘事に、あはれ彼の人の譯の無るに定まれるならば、我が生命を**二**ぎ縮めても助けさせ玉へ、かる道理無き願ひを掛け奉ることの、愚にも恩なるをば知らぬにはあらねど、知りて猶已まんとして已み難き胸の苦しきは、御覽はさぬところ無き神明佛陀の見透したまひて、憫然とも田して我が心をば納れさせたまへ、と祈りたりしが、彼の人の**二**命の本より有りしか、我が命の彼の人の命を補ひしかは知らず大旱に萎れし玉苗の、一夜の露に蘇つて、田面を渡る曉風にけ猶弱々と戦ぎながらも、はや行末の頼もしき榮を見する其の色青青と勢好きが如く、危くも心細かりし病の瀬を過ぎて、全く復現世の光に美しう照らさるゝやうになりし彼の人の運の目出度さ、我が心の嬉しさ。思へば神明も佛陀も確に御坐す世なり。人間を包める運命は雲霧と冥くして得知れねども、其中に神明の御心佛陀の御心は動き働きて、人間の抱く心のさまに酬ひたまふやうの氣ぞする。冥々の中に靈しき力ありて神佛の意を受け、吉も凶も皆其力の爲る事のやうにぞ思はるゝ。神明ま遠からず、佛陀も遠からず、一念の微なる動きも洩らさず知りたまふと覺の。嗚呼、神明も佛陀も猶御覽はせ、我が心の誠を

邪無く、汚無く、偽無く人を思ひて、我が如何にしてか有り果つべき我が世の末を見んとぞ思ふ。實に地を掘れば水に逢ひ、壁を穿てば光に逢ひ、人の心の奥に入れば必ず神明佛陀に逢ひ奉るものと云へるも言ひ得たることかな。我今幸にして眼のあたりに利生を仰ぎ得、冥々の中に御坐して果敢無き此の恐を愛しみたまふ大慈大悲の御心の忝きを感じて、此の嬉しき有り難さ肺腑に浸み徹りぬ。願はくは我長く此心を失はずして頼み奉らんほどに、猶行末掛けて彼の人の上に幸福多からしめ給へ。我が身の幸福をば祈り求むればこそ、たゞ彼の人好かれとのみ思ふころの、此の虚偽無き眞實を汲ませたまへ、と水野は默念したり。

其夜水野は何事を思ひつゞけしにや、更くるまで終に睡りにスラで、二番鶏の唱ふ頃辛くも夢を結びぬ。たゞ思ふ人の病の快き方に向へるを悦んで、おのが職を失へることなどは悔みもせざりしなるべし。

其五

お濱は可笑さに堪へぬ如く笑ひを耐へながら、

『マア如是にニく起きて置いて、而して變に沈着いて居らつしやるの子。先生、今日は日曜ぢやありませんよ。早速となさらないともう遅れますよ。彼人が快いもんで安心して仕舞つて、それで全然氣が弛んで御仕舞ひなすつたのべ。妙に今朝はゆべたりとして澄まして居らつしやるのネエ。何様なすつたのべ、餘りだはべ、をかしくつてよ。』

と戯るゝが如く云ひしが終に堪へかねて、

『ホ、ホ、、。』

と笑ひ出したり。

夢の名残を洗ふ朝茶の淡き味を樂みて、悠然として湯呑を手にして居たりし水野は此の笑に驚かされつ、實に我が心の中の昨日に今日は甚く異なりて寛なれば、外に現るゝ身の様子も、仙には可笑しきほど變れるなるべし。特に掌上に乗るばかりのニ少なる俸米に繋がれても、職務と思へば其職を疎畧にせん心は無くて、身體の疲れきつたる時にも、氣合の如何にしても進ニざる折にも、強ひて勉めて果すべきだけの事を果したる、其の

苦しさを今は免れて、起きるも睡るも心のまゝの、肩に荷は無き境界となりたるを、まだ知らねばお濱の怪むも無理ならずと微笑まれ、

「ハ、何も可笑いことも何も有りは仕ないよ。今日はもと学校へも何へも出やあ仕ないのなもの、いくら沈着いて居てり可笑い事ありやあ仕ない。」
と軽く答へたり。

『ぢやあ今日は怠けて御休みなさるの。嫌な先生ネエ、二故御休みなさるの。』

『なあに怠けて休む譯ぢやあ無いが、今日ツからは私にやあ毎日日曜なのだ。だからもう先生くつて云ふのも止して貰はなくつちやあ。仕方が無いから今までは呼ばれて居たけれども、先生くつて云はれるなあ、先から私あ好きぢやあ無かつたのだからネ。』

『あら、それぢやあ學校をもう御止しなすつたの。』

『あ、二田さんが止したら宜からうといふから止して仕舞ふことにした。』

「何敬高田さんが其様なことを云ひ出したの。二らしい高田さんだことネエ、何故先生に御止しなさいつて云つたの。』
問はれては流石に勇んで答ふべきならねば、水野は唯黙然として笑つて語らず。

『昨夜高田さんところへ入らしたのはその事でしたか。』

「あ、』

『ほんとに可厭な高田さんだこと。可いは、祖父に左様い〇て叱らせて遣るは。左様して復先生を舊の通りにするやうに爲せるは』

「ハ、。折角丁度止して仕舞つたものを、其様な世話を焼かれちやあ却つて困るよ。打棄つて置いて呉れ無くちやあ。

「だつて、それぢやあ先生は、何處か他所へ行つて御仕舞ひたさるんでしやう。此様な詰らない村にやあ居て下さらないでしやう。屹度妾の家を出て行つてお仕舞ひなさるんでしやう。」
と云ひさして水野の面を凝然と見居たりしが

『嫌だは、嫌だは、妾嫌だは。祖父に左様云つて高田さんを

叱らせるから宜いは。』

と眼に露持つて腹立しげに悶えたり。

「ハ、。祖父が何程幅利でも、高田さんは高田さんだから、左様自由の利くわけのものでも無い。また私は今何處へ行くといふことも有りや仕無いから、矢張いつまでも此村に居るつもりだよ。』

『眞實、眞實、矢張いつまでも此家に居らつしやるの。』

『あ、。別に何處へ行かうと云ふ料簡も無いから。』

『嬉しい。』それぢやあ學校へも出ないで始終此家に居らつしやる。あ、。そんなら學校なんか先生が止し仕舞つた方が宜いは。澤山先生が此家に居らつしやるのだから。今後また先のやうに種々の面白い御話を仕て頂けるはネ。』

人の胸の中は更に知らず、飽まで我儘なる處女氣の長閑さに、水野は笑つて點頭かざるを得ざりき。

『これでもう淺草へも行らつしやらないと、眞實に好いのだけれども。』

猶不足氣に如是云ひて嬉然と笑める面つき、また無く美し

其六

罪も無く念も無きお濱の願の是の如きには引かへて、水野が今朝差當つて先づ思へるは、淺草の御堂に詣りて心靜かに報恩謝徳の誠意を運び、かつは猶行末を頼み奉らんとこの事のみなりしなり。

されど淺草に詣らんと思ふ意の側には、強ひて求むるといふほどにはあらねど、若し機會よく我が御堂に詣りてより歸るま」の間に、彼の同情深く信心深き優しく懐しき不幸福の人に相逢ふことを得ば、願はくば相逢ひて一ト言二タ言の言葉をも交へたきやうの念も潜めるなり。昨日の談話にて、其人の詣るは、毎日大抵午前の事にして、午後に詣でしは昨日のみなりと知りたれば、職務に縛らるゝ身の午前は我が自由ならで其人に再び行逢ふことも無かるべきを遺憾く思ひ居たるが、昨日に今日は變れる我が上の、今は何時參らんも心の自由なるまゝ、先づ彼の人の詣るといふ午前に詣りて、幸にして若し相見ゆることを得たらんには、我が五十子の病氣の本復疑ひ無きに至りたる事

をも告げて、御佛の加護を悦び、彼の人の親切を謝しもせんと
の念の潜めるなり。優しく懐しき彼の人に、我が五十子の甚宿
きところを免れて、復び現世の日に照らさるゝに至りしことを、
人を吸ひ入るゝが如き其の愛深き笑顔に悦び欣びて貰ひたき念
の潜めるなり。

水野はお濱が假初の語には耳を假すことも無く、やがて淺草さ
して立出でたり。

幾度か往來し馴れたる路の、眼に古りたる景色は心の留まる右
も無くて、早くも御堂に到り着きたり。先づ常例の如く祈念を
寵めて、少時は何事をも思はざりしが、念じ終りて閉ぢたる眼
を開き、下げたる頭を擡げ、身を起して我が居たる四邊を見れ
ば、夢の裏に現れ來る人の造音も無く衣の音もせずして俄然
■
我が前に湧き出づるが如くに、何時か知らず、我が傍に跪きて
御佛を念ぜる人ありたり。其の柔かに合せたる掌の白々と殊勝
氣なる、其の■のすらりとして見好き、其の髪のめでたき、其
の屑つきの如何にも女らしく優しき、其の横顔の能くば覽えほ
ながら櫻色に美はしきは、嗚呼我が相見んと希ひたりし其の■
にあらずや。正しく昨日は見、今朝は思ひたりし其のお龍なら
すや。御佛を念ぜし今少時の間のみ忘れ居たりし其の優しく懐
しき親切の人ならずや。我が■を漲ぎて聞きし不幸福の物語を
有せる悲しき薄命の婦人ならずや。何ぞ其の掌を合せて念ぜる
さまの哀れ■くして、曾を盡れて思を凝らせるさまの人の心を
動かすや。不思議にも何時の間にか此堂には参り合せたること
思ふ時漸くに念じ終りてか、身じろぎして靜に女は立上りたり
『……………』

聲無くして其處に呼ぶ聲ありり、應ふる聲ありたり、言無く
して其處に語れる言ありたり、酬ひたる言ありたり。

其七

「昨日はいろく御厄介に、」

『いゝえ、却つて御迷惑でございましらう。おとうさんが彼
様な氣合の人だもんですから、御遠慮の無いことばかり致す
うになりました。定めし御蔑視なすつた事だらうと、後になつ

て二人で左様申して居りました。』

『イヤ、どうして其様なことを思ふのですか。たゞ私は何の因縁も無い方にお世話をかけたのが済まぬ様な氣が仕ます。お會ひなすつたら彼の方に宜しく仰あつて下さいまし。』

『ホ、大ニ折目高に物を仰あること。彼の人は彼様した人なので、御氣にお掛けなさる事はありやあしません。それはまあ何様でも宜いとしまして、今日は何でも無い日でございます。すのに、どうして今頃御いになりましたの。貴下の拜んで居らした御後姿を見まして、妾は初は氣の迷ひかと思ひましたよ。だつて貴下が今頃御いでなさらう譯は無いと思ひ定つて居たのですもの。』

『ハ、私はまた何時の間にか私の傍に貴嬢の來て居られたのに吃驚しました。』

『ホ、貴下が一心になつて拜んで居らしたから、吃驚なさらぬやうにと思つて、悄悄地妾も拜んで居りましたのよ。』

『それは兎も角も、今日若し貴變に御目にかゝれたら、先づ笠一に御話をして、悦んで戴きたいと思つて居りましたが、御蔭様で病人も何様やら持直して、醫者が屹度本復すると保證つて呉れたやうなところ迄には漕ぎつけました。もう心配は無さ、うになりました。御榮じ下すつた甲斐もあつて、御親切もまな届いたと申すものでございます。ほんとに病人とは御縁も薄い貴卿が、かうして毎日々々歩を運んで下すつて、御願を御掛け下さつた御芳情はおろぞかには思ひません、病人が快くなりましたにつけても有り難く思ひます。今といつて今は何様御禮の爲やうも存じませんが、何ぞの折には屹度貴卿のなめに、貴師の優しい御芳情に對して其丈の御返禮を爲やうとは思つて居ります。費卿の御芳情は長く忘れません。』

此の事を言はんとおもふ意の充ち満ちたるに、言葉も自から勢籠りて、口ばかりの挨拶ならぬは確乎としたる眼つきにも著しお韻は生眞面目に如是云はれては、眞舳には當り得ざるやうの氣も仕て、安からぬ心地の簿に爲ればにや、たゞしは又他知らぬ考の別に有ればにや、我が祈願の甲斐の見えしを悦ぶとも舞、水野に斯ばかり禮を云はれしを嬉しと思ふとも見えず、却

つて物差したるが如く沈着かぬ様子になりて、時々は見ても
き遠方の額などにちら／＼と其の美しき眼を込らせて聞き居し
『まあ眞實にそりやあ何よりの事で、こんな嬉しいことはもう
ございません。どんなにか貴下の御嬉しいことでございますや
ノ。貴下の御胸の中を思つて見ますと、妾も何だか嬉し
出さうになります。何も妾なんぞが御願ひ申したからといふ譯
ではございませんが、あれ程に一心になつて御願ひなすつた
貴下の御念力だけでも、佛様が打棄つては御置きなされなくつ
て、それで五十子さんが快く御なりなのでございませう。ほ
んとに五十子さんは御羨ましい、御不幸のやうで御幸福の方で
す。神様佛様の御憐愍さへかゝつて居る方ですもの。』

と末は誰に云ふとも無く言ひたりしが、はしたなしと思ひてや、
調子を變へて、

『歸りましたら早速師匠にも左様申しまして、御丹精甲斐の有
つた事を聴かせまして悦ばせませう。定めし屹度有り難がる
事でございますやう。』

と言を添へたり。

其八

際限無く御堂の内に若き女と立ち話して參詣の老若に面見られ
んごとの好ましからぬ心地すれば、水野は談の切目に本尊の方
を一拜して、漸く下向の路に就かんとするに、お龍は間隔たら
ず連れ立あては來ながら、遅々として却つて水野の歩を濫ら山
とすするが如し。

變堂の階段は降り盡しぬ。貴影行交ふ長々しき石營の路を二
は辿れり。こゝは賑はしからぬ時も無きところとて、ぽつくる
の響き、雪駄の鳴、人聲物音一つになりて、たゞがや／＼と譯
無く變がしく、七子の袖は擦れ違ふ縮緬の袂、矢の字の帯は
る海軍幡、甲家の旦那様乙家の奥様、女の兒も男の兒も目まど
るしく往蒸すれば、遂げては我も他を見るに由無く、他もま
我をゑるに由無く、葉くは他の談も耳に入らねば、戦が談も
た他には聞えぬなり。お龍は此の中を連れ立ちて歩きつゝ、や
やもすねば獨立ちて先に行かんとする水野を追ひかくるやうに
して、

『アノ、今日は御休みの日ぢやありませんまいのにネエ。わざわざ御林みなすつて御禮参りにいらした譯なの。』
と、若し然もあらば、餘りに彼の人の事を思ふ心のみ強くして何も彼も忘れ果てたるが甚し過ぎたりといふやうに、聊か笑を含んで問ひかけたり。

先刻にも受けたる問なら、答ふるも煩はしと思ひて顧ざりしが、今又如是様子に問はれては黙りても居難く、

『ハ、、まさか左様いふ譯でも無いのですが、丁度職務は辭して仕舞つたので、それで萬一したら貴卿に御目にか、れやうかといふ考も有つて、平日よりは早く出て來たのです。仕合ニ巧く御目にかゝる事が出來て、聞いて戴かうと思つて居たことも聞いて戴いたので、悉皆思つた通りになりましたが、これも下らない職務なんか廢して仕舞つた故でしやう、ハ、ハ、』
と軽く打笑ひたり。

水野は軽く打笑ひたれども、職務を棄てたりといふ事のお魂には軽からず聞えやしけん、其の眉を顰めて心配げに

「お職務を御止しなすつたのですつて。何故其様なことをなすつたの。何も御困りなさる様な事は御有んなさりやあ仕ますまいけれどもネエ、何だつて其様な事をなさいましたの。そんな事をなさら無くてもぢやありませんか。』

と滿腔の同情より私に生活の道の便宜悪かるべきを氣遣ふものの如し。

『ナニ、別に無理に辭めたいと思つたのでも無いのですけれども、辭めさせられて見れば仕方がないわけですもの。』

『だつて、何故ネエ。餘り御不勤でもなすつたの。』

『イ、ヤ、そんな事は決して爲ん私です。』

『ぢやあ其様な事になる譯が無いぢやありませんか。もしそれぢやあ萬一したら五十子さんの事で評判でも立つて、其の爲といふやうな譯ぢやあ無くつて。』

『ハ、、云はゞ其様な事の爲なんでしやうが、何様でも其様な事は構やあしません。まさか下らない職務を止したからといって困りも住ますまいから、いつそニ小な職務なんかに縛られな
い今日の方が宜い心持が仕ます。』

『そりやあ左様でも御有んなさりましたやうが、でもまあ差當へて……。ほんたうなら五十子さんの御母さんが何様にでも仕すあげるのが道なんですけれども。』

何をか思ふ、お龍は言ひ澱んで考に沈みしが、水野は却つて二冴として、

『ハ、決して何も心配して下さらんでも可いのです、考案。

あるのですから。信心を仕て、愚だと云はれて、二斥されて仕舞つた、こんな馬鹿でも、男は矢張り男ですからネ。イヤ此處で失敬しましやう、左様なら。

と書生風に淡泊に挨拶して別れ去らんとす。何時か石路は既に歩み盡せるなり。

何にか心を奪られ居しお龍は、水野の告別の辭に打慌て、

『ぢやあ明日また御眼にかゝれますの。』

と辛くも一句問ひかくれば、既に十餘歩を隔たりし水野は無言に點頭きて、情無きが如く其儘終に東に去りたり。

去り去る百歩餘りにして、水野は徐ろに首を回して見れば、人の繁く車の煩きが中に猶悠然と立つて、我が方をや見送り居たる、お龍の面の花と白きが仄かに見えたり。

其九

○疾病のやうやく快くなり行くさまを、薄紙を二ぐが如しとは誰が云ひ初めけん、さしもに一時は危かりし五十子の、天譯にだ盡きねば人力効ありて、實に此頃は薄紙を二ぐが如く、日に日に少しづつ快くなりゆけば、年齢の勢も藥餌の能もこゝに現れ來りて、一陽來復の機待ち得たる若樹の、猶雪には籠められ水には二されながらも、既に漸く芽をも蕾をも含み居て、やがて春風の渡らん曉に誇らんとするが如く、簞れ果てたるが中にも、はや行末の榮りる色は微見ゆるに至れり。

されば愁の雲厚く蔽ひて、火の消えたるやうに陰氣なりし此の家、五十子が面の色の美くなり行くに連れて、一室の中は日の出でし如く賑やかになり、先づ年少の松之助より何ぞに付けて笑聲を洩せば、元氣溢るゝばかりの看護婦も折節は高笑ひして、こゝは人々の機嫌も好く、談話聲も所ゆる、陽氣の家と打て變りたり。

體温は高下少くなりて漸く平常に復さんとするの勢を示し、脉搏は猶弱けれども走らず満らずして危険の虞の既に去りたるを現せり。恐ろしき■に惱める日の少からざりしかば、肉は落ち骨は立ちて、今猶一人しては何とする事も叶はぬほどに衰へ果てたれど、一昨川より昨日は好く、昨日より今日は確乎として、病勢の烈しかりしに纖弱き婦人の身なれば衰弱こ之尋常越えて甚しけれ、これより五六週間も立たば、必ず病まぬ往日の健康に回つて、日々の勤務を執るに至るを得べしとの相良尾竹の言葉も偽りなるまじく思はれぬ。

五十子が状態是の如くなれば、松之助は自ら■き乳を薦めたフ或曉、其の姉の面をつくぐくと打護りて。

『もう大丈夫だ、もう大丈夫だ。ほんとに怖いと思つた時もある有つたけれ共、とう／＼僕の姉さんは僕の姉さんになつた。』

と無邪氣に叫び出して笑ひ悦び、相良が手より來れる着護婦へ芳野は、或夜體温表を記し終れる次に、其表をつくぐ／＼眺めたがら、

『マア宜かつた事、もう如はいふ様子になつて來れば心配は無い。一時はほんとに何様なるかと思つたけれど、マア患者さんも幸薦、私も幸福で、患者さんは辛棒甲斐があり、私は看護田斐がある事になつて、相良さんに對つても面目がある。』

と獨語ち、又、吉右衛門に命けられてお澤が許にありて人々が爲に雑事の勞を執れる下婢のお鹽も、

『水野さんの念力だけでも治癒ると人が言つたが、ほんに可怖いもんだ』とう／＼治癒るるだあ。病の高じた時あハア、何様しても彼世へ迂り込みさうな様な顔を仕て御座つた彼の人、彼の危かつた人を取り止めることが出來たかと思ふと不思議でならない。おらあハア始めて人の念力といふ可怖いものを目の前に見て魂消た。醫者業ぢやあ無いだ、全く醫者業ぢやあ無いだ。』

と下司の常として言葉こそ多けれ、これもまた五十子が回復を悦べる數には洩れぬに、たゞ彼の強慾のお澤婆のみは、

『生きてつて面白いとも定つて居ない世の中に、とう／＼彼の人も生残つたやうだ。まだ業が滅しないので死ねないと思へ

るだ。水野の世話で死な、かつた丈に、却つて今後が面倒らしい。無錢で買へるものは一つも無いだ、借は返さずには眩度濟まないだ。物を取れば代りを與る、借りた茶は茶で返す、酒は酒で返す。人の親切は何で返す。生命の恩は何で返す。生きたが彼の人の幸福だか何様だか。病氣は無くなつただらうが、可厭なものが残らう。死損つて氣の毒の様だ。治（てから彼の人が何様な氣持がさつしやらうかサ。業が盡きないだ、業が残つた、何癒ることが芽出度いに決るかい。）」と、**二**りに松之助やら看護婦やらの尾に従いて悦べるお鹽に對つて、例の如く**二**さげに冷笑ひて言ひ聞かせたり。

其十

凝れるものを觀れば石あり壁あり。生ふるものを觀れば雜草おり百合あり。同じ人間にも、一生おろかしく衣食のために逐ひ使はれて、猶其の足らざるを憂ふる額の皺を深々と疊み、おへが働きの無きは省みずに、他人を恨み世を謗りて甲斐無く悶うながら老境に入るもあり、又生れつきの心の丈高く胸の海濶くして、此のむづかしき世に身の取り置き拙からず、憂さも苦しさも、するりと切り抜けて、屈託せぬ顔色の何時も若々と、雲より上に居る月の、澄し返つて暮すやうなる優れ者もあるなり。お龍は自己が身の上の今の果敢無さを差らひて、我が口より我が友なりとは憚りて云はねど、彼方は何處までも隔意無く、七龍を友とも妹とも待遇ひて、親身も及ばず優しくするお形といへる一美人あり。

叔母が無理壓制の婿取沙汰を厭ひて、駿**二**を**二**け出で、東京に來りし時、お龍が先づ頼りしは此女にして、お龍と共に淺草に遊びし日水野に遇ひて、水野をして其の美に驚かしめしも此女なりけるなり。

お形が身分を問へば、世に聞えたる一代分限の筑波何某といへる六十男の外妾に過ぎぬなり。然り、藥研堀附近に數寄を凝らせる家を構へて、賑やかなるが中に靜閑に暮すほどの贅澤を縦にし、美衣を纏ひ美饌を口にし、萬般幸福に世を経るとはいへ、實に其の身分を問へば外妾には過ぎぬなり

されどお形は人の正室たるを得ざるが故に身を日陰者の其位に

安んぜるにはあらず。今を去ること七年はど前の事なりき。筑波が其の正妻を失ひし時、面の美しさばかりに迷ひ溺るゝがごとき痴漢ならぬ筑波は、よくく見定めたるところやありけん、お形を引上げて正室とせんとは云ひたりしなり。されば其時む形にして強ひて辭み立だにせざりしならば、今は此の世の表面に立ちて、立派に筑波夫人と崇め仰がれ、夫の勢力の及べる培域には反身になりて誇りて生活すことの二ふべき筈なるを、我から我が出世を遊り止めて今も猶外妾たるなり

筑波が引上げて正室とせんと云ひし時、お形は如何なる意にて之を辭みしか知らず。されど其の外に現はれたるところにては、お形は一向謹み慎みて、

『妾を引上げて下さらうといふ御思召は嬉しうございますが、妾は實家も無く後楯も無い身ですから、左様仰あつて下さるから好いはで成り上りましたら、人の誇り嘲りは何の様でございませう。其も妾が悪く云はれるだけで濟めば宜うございますが、針ほどの事も棒ほどに云ひたがる人の口ですもの、何ぞの折には妾のことを云ひ出して、彼様なものを引上げたのは何事かと、屹度貴下を悪く云はずには居りません。よし何を人が云つたつて氣になさるほどの弱い貴下では無くつても、妾の所爲で貴下の金箔を二二すのは妾は嫌ぞす。どうせ今まで日陰者ブ濟まして來た妾ですもの、いつそ一生日陰者で濟まして終つて人に目角を立てられずに生活した方が性に合ひさうです。貴下さへ見棄て、下さらなければ、自分が出世して貴下を悪く云はせやう氣はございません。

と、いと眞面目に道理正しく斷れるのみか、扱打解けて碎けて笑ふ酔の後などには、面と對ひて遠慮も無く直接に

『正室になりやあ正室だけの荷を背負はなけりやあなりませんからネ。力の無い妾が其様な事を仕て肩を凝らすよりやあ、氣樂にして斯様して居る方がマア宜さ、うですから。』

と云ひて肯はず。乗らば乗るべかりし玉の輿を自ら棄て吝まざりしかば、某子爵の姫君は筑波の妻として今の榮華を受け得たまふに至りしなり。

されば筑波はお形を日陰者として世にこそ隠し居れ、之を愛で

重んずることは今の正室にも勝れり。

お形は是の如くにして此の世にたゞ一人の筑波の意を失はざらんとする外には、何の心を用ひ氣を勞らすことも無く、年の首より年の尾まで、身の周圍の物より庭の隅の草木まで、一切を榮華の頂上の仕度三昧に振舞ひて、誰に苦情を云はるゝことも無く日を過ごせるなり。

其十一

六疊の茶の間、茶の間とはいへ大抵の家の客室より美しく、柱より敷居鴨居の木口の結構さ。格の配りに物好を見せたる細骨の纖巧なる二間四枚の障子に、繼目無しの紙は雪より白く椽の方より光線を取りて、上は嫌味氣無き枳の天井、下は縁無し of 備後表といふ室の内の、好きはどに据ゑられたる多分太田あたりで指させたるらしき烏桑の長火鉢と、其の横手に置かれたる思ひ切つて立派なる支那製の紫檀の茶棚とは、先づ入るもの目を惹きて、此家の女主人の十二分に財に富み足りて、且つは其の勸工場品に望み足れりとするやうなる没趣味者ならぬを示し、壁の塗り色、押入の襖の模様まで、すべて釣合ひてしつゝ、りと整ひたるが中に、おのづから薄手ならず又わびしげならで飽まで『良いもの好き』『粗悪なもの嫌ひ』の趣きは見えたり、『お龍ちゃん、お前御客様らしく仕無いでも、もつと此方へ寄つて御あたりナ。』

大島紬は好いものなれども、何處となくぼやついて、すつぺらとせぬが厭なり、平常着は此に限ると、平生御召縮緬を着通せるお形の、今も相變らず其品づくめの衣服つき見好く、絹物の坐蒲團の上に居て、火鉢より南部の鐵瓶を重さうに取り下しながら斯く云へば、

えゝ、姉さんのところへ來て御客様らしくなんぞ仕や仕ませんがネ、まだ火の傍へ行きたいほど寒かありませんもの。』

と笑ひつゝ、お龍は言に従つて聊か坐を進めたるが、實に其の顔は見るからが冴々しく櫻色に艶にして、如何にも此の頃の寒さ位は何とも思はぬらしき様子をあらはせり。

お形は坐を進むるお龍が頭髮を一寸見しが、女同士の談の緒は先づ其より解るゝ習なり

『今日もまた束髪にしておいでだネ。此節は何時見ても結つては居ないのネ。』

『ハア。姉さんでさへ矢張束髪になさるぢやありませんか。まして妾なんか。出る先に立つて一々人手を假りるのが億劫なものですから、つい自分でもつてぐる／＼と巻いて仕舞ふので、似合は無いで可笑くつて。』

「ナアニ似合はない事は有りやあ仕ないよ、ぢやあ今日ももう何處かへ御出出だつたのだネ。

『ハア一寸』

こゝに至りて女主人は其の美しき面に微笑を泛めて、

『當て、見やうかへ。』

と戯るゝが如く云へば、お龍は言も無く莞爾と笑みて親しげに軽く點頭けり。

「屹度また淺草へ御出だつたのさ。」

『いゝえ。』

「なに、いゝえの事が有るものかネ。ソラ／＼口は詐をお云ひでも顔は正直だよ、ハイ觀音様へ参りましたと、その笑つて居る眼が、チャーンと左様いつて居るよ。』

『ホ、ホ、ホ、。』

『ホ、ホ、、それ御覽、御手の筋たらう。御精が出て眞實に御奇特の事だネエ。』

『あら姉さん、調戲つちやあ厭ですよ、あんまりですよ。』

『左様さネエ。何も彼の人に御會ひでも無かつたらうに、調戲はれちやあ惑然だつたネ。』

『もうようござんすは、澤山いろんな事を仰あいよ。今日も不思議に落合つて會つて來ましたは。』

『オヤツ。そんな譯は無いぢやあ無いか。今日は平常の日だし、彼の人は職務が有るつていふ談だつたもの。ぢやあ矢張打合でも仕て御置きだつたの。』

「いゝえ、そんな事は有りあしませんがネ。彼の人が職務の方を辭して仕舞つたので、それで今日は御午前に出て來たつて云ふんで。ひよつくりと御堂で會つたわけなのですよ。

『へしエ、職務の方を辭したつてあ、解つた免されたん

だネ』

『左様なのよ、事實は免されたのですつて。其について妨さんに些お願があつて來たのですがネ。』

と、や、眞になつて談話をせんとするお龍の眼色を見て、お形は軽く一寸制止めつ、

『御待ちよお龍ちゃん。彼室へ行つてから緩々と談を聞かうから。』

と、奥の方を指さし、

『あら姉さん、此室で澤山だは。』

とお龍の云ふを打消して、

『妾が茶の間に居るの、嫌なのはお前も知つて居るぢや無いか。』と遮り、さて下手へ向つて小間使のお春といへる可愛らしき兒を喚び出し、

「妾の部屋の茶道具を能く清潔に仕てネ、そしてまた彼室へ持つて行つてお呉れ。お茶は妾が自分で淹れるからネ、お前は御菓子を出して、……ア羊羹はいけない、玉簾の方を切つておで。』

と命令け、

『さあ此方へ御いで。』

と立上つてお龍を奥へ伴へる時、恰も時計の音は三時を報じた男にもいろくあれば、女にもいろくありて、まことにお形は今みづから言へるが如くに、平生長火鉢の前に坐りて茶の間に在ることは悦ばずして、おのが室と定めたる小座敷に端然として居ることを好めるなり。されば是程の好き茶の室をも、一ト風ある氣性からは、床の間さへ無き室と賤しく思ふなるべし。

其十二

市中の事なれば廣くはあらねど、特と花物を嫌ひたる常磐木のみの庭の、見えぬところに人の手の十分に用ひられたる説とて、枝々は好きほどに折り合ひて茂りながら、隈々は汚からで明るく、わづかに大からず小さからぬ燈籠一つの形状も佳く時代にありて一寸面白きがほかには、別に此といふ價の高き樹も珍らしき石も無けれど、一體の調子の蟠屈無くすらりと、幽閑にして、特設へ氣も無く、見る眼安く穩和なるところに自然飽かぬ

床しさありて、夏は梢に新月の低う懸る宵、不如歸の一ト聲をも待ち得ば縣とおもはれ、冬は雀膨るゝ寒き日の雲破れて時雨はらくくと落つる夕、或は又雪の薄綿萬物を包む曉など、如何にと忍ばるゝばかりなり。

されば折ふしは此家にも出入りする筑波が氣に入りの骨董屋の老漢に、利齋といひて、内々は茶道天狗の小賢しき男、此の庭を見て、

『猫の額ぐらゐの庭だが、彼の人の住居に彼の庭は何ともいへない。庭の出来が好いばかりでは無い、彼のこつくりした素樸の景色の中に、繪の浮いて出たやうに美麗な福相の美人の彼の人澄まして居る對照といふものは、何のことは無い、茶壁の何も無い床に一輪の白牡丹を活けたやうなもので、一ト二人の眼を驚かす。彼の人花だから花は要らない。これを思へば花と見られるほどの容姿も無い女なぞが、自分の庭前に花を植ゑたりなんぞして、妙に優美がつて好い氣になつて居ても、下二に花の近傍にでも彷徨かうものなら、宛然海棠の下で狸がチテンでも仕て居るやうに見えるのが多い。茶道を知らない奴けまあ其様なものだが、彼庭が彼の人の好みで出来たといへば、彼のお形さんといふ人は顔が美いばかりぢやあ無い、何も彼も解る人だ、中々一ト通りや二タ通りの人で無い。道理で物品を買つても買ひつ振りが可い。そして倦きつぽい彼の筑波さんが、何年といふものこびり付いて居る。どうも偉い、茶道を知つて居るから何様も偉い』

と、自己が高慢を交せて評したる事ありき

家の一角の小座敷の、僅四疊半には過ぎねど、此の庭を東南い受けて、陽氣なれど麻を長く仕たれば明る過ぎず建てられたるが中に今もお形お龍は相對して坐れり。薩摩杉の天井板の木理美はしく、根岸茶の壁の色沈着きて、床にはお形が好みか箔波が好みかは知らず明人らしき書の小幅を掛けて、棚にはこれは慥に主人が玩弄に疑ひ無き繪卷など取り繕はず載せたり。出入口、窓の取り方なんと總べて茶室めきたれど、釜を掛くるフとは嫌へるにや爐は切りてあらず、一面に美しき敷物の敷きつめられて、一方の隅には今物らぬ女用の螺二の黒き小机の、

漆光は■に■けて好き頃に古びたる善美いふばかり無きが上に同じやうなる手の小さき硯箱置かれ、机下にも同じやうなる手匣の置かれたる、此の前は女主人が常の座處なるべし。

お形は今其座を背後にして、是眞が蒔繪の桐胴の手爐の小さきを横手に、此方に向きて茶を淹れ居れば、お龍は清楚とこそ仕て居れ、おのが銘仙織づくめの衣服の身の、居るには憚らるほどのお納戸緞子の蒲團に、やゝ安きかぬるが如く坐りて、客といへば客ながら、おのづから貧富の相違に壓さるゝ氣味あつて生れし氣象の徳には少しも萎げぬ顔つきの我は我だけに冴きて、毫末の隔て氣も無く人を親む眼の中涼しく相對へるさまたとへば一人は晴の日の晝に笑へる牡丹ならば、一人は野の刷のそよ吹く秋に、寒さ知らぬ色して咲ける木芙蓉ともいひつべし。

其十

古薩摩か古九谷とありさうなところを然は無くて、永樂あたり稀品なるべし、形状品格佳くして彩釉快く覽はしき京焼の茶沿を、五指白玉の如く美しき手に自ら扱ひて、既に鎚目の銀瓶の湯を徐々に注し終り、今や一盞に玉露の花香を湛へて、お形はこれをば與へ遣りつ、鍋島の菓子皿をば又聊かお龍が■へし推進めたり。

お龍は心底より悦びて茶を味はひつ

「いつでも眞個に勿體ないやうな佳良な御茶ネ。

「ホ、、、お茶ばかり褒めずとも淹れ方も褒めて、お呉れな。

『ホ、そりやあもう、口へ出しては云はなくつても……■』

『オヤ左様、嬉しい人ネエモぢやあまあ澤山御菓子でも御食りなすつて。』

『厭ネエ、ふざけて。姉さんは人が悪いは。』

とお龍は一寸瞭つたるやうな顔して云ひ、

『それに此の御菓子は妾は澤山ですよ。

といふ。

「嫌ひ。」

と女主人は軽く眞面目に問ふ。問はれて莞爾なる舊に復りなが

ら、

『まあ左様なの。』

と氣の毒さうに答へたるは、思はず我が好き嫌ひの我儘を口走つたる無遠慮を差ぢて、今さら詮方無くも猶少し暖脉に言葉を濁せるなるべし

「いけなかつたネエ、甘味嫌ひとばかり思つて居て此品が二ひだつたとは知らなかつたよ。もつともネ、一體此は御茶に條り賞めたものぢやあ無いの。そればかりぢやあ無い、鳥貝の御鮨もじだの玉簾だのといふものは、悪く氣取つた女に食べてせて遣れなんぞといふ位のものだつたのに、つい妾が氣が注なかつたよ、堪忍おし。今他のものを何ぞあげるから。」

『何故？。氣取つた女が何様か仕でもするの？。』

『ソレ鳥貝はお前早くは咬み切れ無いし、玉簾はホロ／＼と二れ勝だし辛くはあるしするからネ。いつまでも口をムグ／＼ナせて居たり、だらし無く膝を汚して、そして辛さを辛抱する二顔を仕て居たりするのなんぞは見好いものぢやあ無いからさ。』

『あらツ、妾あ其様な譯で嫌ひだつていふのぢやあ有りませんは。姉さんのところへ來て一寸だつて氣を置いてなんぞ居やあしませんのに。好うござんすよ、一人で悉皆頂いて仕舞つて、其邊中食べ零して、そうして澤山見つとも無い泣顔をして、築つていたゞきますから。』

『ホ、ホ、ホ、ホラ始まつたよお龍ちゃんの癩癩が。だがお前が一寸口惜しいといふ思入をすると、色艶は好し、眼は清しいし、眉毛は奇麗だし、それが悉皆役に立つて顔中が活きて見えて來て、ほんとに二二で可憐らしいよ。』

一好うござんすよ。」
此度はいよく晩りていよく言葉少く、恨めしげにじろりよお形を睨みて、つんとして其の儘横を向かんとせしが、閉事は兎に角、云はで叶はざる用事はあるなり、雲時間を置きて面を喜び、

『ネエ、姉さん、今彼室で云ひかけたのはネ、眞個に妾の御師ひの事なんですから聽いて下さいましな。』

と、心配氣にお形が面色を見ながら、いつはりならず心を籠二

て云ひ出したり

『あ、可いとも。お前の御頼みの事なら何でも聽いてあげるも。』

此は極めて易らかなる語氣のいと輕き答なり

『ほんとに。』

此方は力を入れて重ねて問へば、彼方は沈靜きつて平氣に、

『あ、ほんたうにさ。』

と事も無げな。

『あ、姉さん有り難うございます、一生覚えて居ますよ。ぢやあ申しますがネ。かういふ譯なんです。』

と説き出さんとするをお形は抑へて、

『可いよお龍ちゃん、かういふのだらう。彼の水野さんていと人が職務を離れたに就いちやあ、何様か彼の人を困窮させたく無いので、妾に口をきいて貰つたら家の旦那の方にでも好い口が有りやあ仕まいか、出来る事なら好い口を捜し出して持つ一行つて遣りたい。と、かういふところからのお前の御頼みなのぢや無くつて。』

と全くお龍の胸の奥の文を鏡に取りて見る如く云ひ出したり云はれてお龍は驚いて眼を瞬り、

『まあ、何様して然様不殘妨さんは知つて、り。妨さんの智性の深いのは前から知つてますが、ほんとにまあ、何様すれば其様に人の意が解るの。妾あ餘り其の通りなので怖いやうな釘が仕ますよ。全く然様いふ譯の御願でわざ／＼來たのですが何様いふものでしやうべ、姉さん、聽いて下すつて。』

と正直になつて頼み聞ゆるを、お形は憐むが如く憐まざるが如く冷かに見やりて、

『頼みを聽くも聽かないも有りやあ仕ないがネ、お龍ちゃん、お前そりやあ詰らない事だらうよ。』

と、いと物靜かに先づ一句云ひ斷りたり。

其十四

我が胸の中の所思の底を盡して説き中てられたるに、一度は先づ驚き服したるも、其れを詰らぬこと、唯一言に斥けられては、物に堪へぬお誰の心平らかならず、思はず顔を二と擡げて

『何故ネエ。』

と詰り氣味に咄嗟に言葉を返し、が、見れば古風の内裏雛の如くに端然としたる面つきの、細けれど亘の長くして特にはつきりと明らかなる眼を、我が上にちつとお形の注ぎ居たるに、其の沈靜きたる態度の中に具はれる自然の威は、輕々しく慌たしき我を壓す如く覺えて、何といふ事は無けれど當り難き心地の爲、氣勢忽ち挫けて語氣も萎々と、

「詰らないつて、其りや然様かも知りませんけれども、妾にやあ些も然様は思へませんは。下らないかも知りませんけれども妾の思つてる事を、ネエ姉さんどうか一ト通り聞いて見て下さいな。』

と、憐惑を乞ふが如くに云ひ足したり

人に頼みごととするもの、心の中ほど苦しきは無し。強ひるほに頼まねば願望は成り難く、強ひ過ぎて怒られて仕舞へばそれまでなれば、願ふ意の切なれば切なるるり、我が言葉の斟酌氣を使ひて、斯様云ひて宜かるべきか悪かるべきかの心配に人知れず幾干の胸を痛むるなりお形は我が愛するお龍がいらしき心の中を、早くも其の目色語氣に猫し知りて、たちまちに面を和らげ笑を爲りつ、

「まあお龍ちゃんの思つてる事つて何様いふ事なの。」

と、云ひ出で易きやうに路を開きたり。

お龍はこれに勢を得て、

「経過を御話し仕ないぢやあ、何だか單、妾の餘計な物數寄のやうに聞えますからネ、長つたらしくても最初つからいひますよ。まあ一番初つからいひますとネ。

と、先づ語り出して縷々と語りつゝけぬ。

『もと彼の水野つていふ人は妾の知つてた人でも何でも有りやあ仕ませんがネ。今妾の世話になつてるお師匠さんに義女があるのです。會つた事が無いから面は知りまとなが好い容貌ださうだし、學問も中々あるさうで教師さんを仕て居るんです。お五十さんといつて、沈毅者でネ、もとつから繼母とは氣が合はないので全然離れて居て、一人立で何様か斯様か遣つて行つたのです。世話になつて居て悪く云つちやあ濟みませんがネ、

お師匠様は随分我儘ぢやあり、品行だつて堅い方ぢやあ無い勝手な人ですから、眞正の理屈を云やあ端正として居るお五十さんの方が正しいのでしやうサ。だけれどもお師匠さんに云はせりやあ、變に高慢で、執拗な可厭な女だつて云ふんです。まあ其あ何方が眞正だか會つて見ない人の事ですから分りませんけれどもネ、其のお五十さんていふのが弟の世話まで焼いてゐるのに、お師匠さんは何も少に管はないで、自分づ取るものは自分で使つてお酒なんぞを飲んでるのですも、まあ何様してもお師匠様の方：阿扇は上げられませんかやネ。ところが其のお五十さんといふ人が窞扶斯を患らつて、生死の分つない怖い瀨にハかつたのです。それを何様でしやう家の御師匠様は振り向いても見ないのです。もとよりお五十さんが財産を有つて居やう■やあ無し弟ッ兒はまだ一向の小兒なんですもの、困つて仕舞ふのは知れ切つて居ます。其處で彼の水野さんていふ人が世話を仕たのでしてネ、彼の人はお師匠様にもお五十さんにも赤の他人なのです。」

其十五

『過日も一寸御話しを仕たのですから諄くは云ひませんが、廿の赤の他人の彼の人とお五十さんとの間は、たゞ互に同じ學校に奉職めて居るといふだけの事です。そりやあ成程お五十さ々を思つて居るからとはいふもの、何も有り餘つて居る人ぢやあ無し、學校の先生なんぞを仕て居るのですもの、その懷中合も知れて居ますはネ。その樂でも無い人が無け無しの中で何様か工夫をして、お醫者さんも頼んで來る、看護婦も附ける、下働きの小婢まで添へて置いたと云ふなあ、普通大抵の親切ぢやあ出來ません。でもまたお五十さんが彼の人と思ひ合つて居てのの人の親切を身に沁みて悦んで心底から嬉しいとでも思ふよいふのなら、随分彼の人も苦み甲斐がありましたやうが、性が合はないとでも云ふのでしやうか、御師匠さんの談では嫌つて嫌ひ抜いて、有難いとも嬉しいとも思ひさうも無いといふんですもの、彼の人の立つ瀨は有りやあ仕ませんはネ。それに段々し吾家の御師匠さんの口占を引いて見ますと、今度の事の起るすつと前から、お師匠さんは彼の人がお五十さんを思つてるの■

附込んでネ、將來はお五十をあげまじやうといふやうな事を巧く匂はせて、何とか彼とか口實を拵へては若干金かづつ絞つわらしいので、どうも後前を能く考へて見ると屹度さうなですよ。』

『へーエ、罪な事を仕たもだネエ、お關さんといふ人は。』

「罪ですともはんとに。あんな生眞面目な初心な人を欺すのですもの。』

『ぢやあ、お前の御師匠さんていふ人は悪い人ぢやあ無いか。』

『唯、まあ善い人たあ御師匠様ですけども云へませんネエ。で、吾家のお師匠様が萬一普通に人情合の分る人ならば、従前の事は何様でも斯様でも濟んだことだから仕方が無いとしても、今度は云はゞ水野さんの世話一ツてお五十さんを取り留めたのですから、床上げでも濟んだ其の曉にやあ、たとひお五十さんが何と云はうとも割つ口説いつして、水野さんに嫁るやうに_二も仕なくちやあならない筈だと思ひますは。ネエ姉さん、然棒ぢやありませんか、義理つてえものがネエ。

『成程お前がお五十さんの御母さんだつたら然様も御爲だらうとおもはれるよ。』

お龍は此のお形が答に少からぬ不足の色を現したり

『ぢやあ姉さんが若し御師匠さんだつたら。』

「ホ、、挨拶が些氣に入らなかつたネ。妾がお五十さんの母さんならカエ。さうさねエ、妾ならまあ、先へ恩返しを仕て置いてネ、世話になつた恩は恩で水野さんに恩返しを仕てネ、縁の事は其から後で決めやうと思ふネ。』

『然様。それならそれで其もまた譯の分つた大變に良い仕士だと妾もおもひますは。ところが吾家の御師匠さんは妾の云(たやうに仕やうでも無けりやあ、姉さんのお云ひのやうに仕やうでも無いんで、たゞ病患い時やあ人まかせに仕て置いて、治りやあ自分の子つていふやうな勝手な料簡で、いつまでも水野さんは釣りつばなしに仕て打棄つて置かうといふんですもの、酷いぢやありませんか』

『そりやあ酷いとも。酷い人だよ。聞いて見りやあ眞個にお前の御師匠さんて云ふのは悪い人だよ。』

「でもまあ縁の事は當人同士の事で、親の思ふやうにばかりもならない理も有りまじやう。ですからお五十さんが嫌なら嫌で強ひるわけには行かないとして、其あ其で可いとしたところが恩は恩ですもの、恩は何處までも着なけりやあなりません。■
して水野さんが困るといふ時節になりやあ、何様しても知らん顔ぢやあ居られない譯で、出来ないまでも心配だけなりと仕な
くちやあなりませんはネ』

其十六

『ところが吾家の御師匠さんと來た日にやあ眞個に酷い人で、妾がこれ／＼だといふ話を仕て聞かせても、フーン然様かエと云つたばかりで氣の毒とも云はずに、黙つて懷手で高處で見物しやうといふんですもの、餘りぢやあ有りませんか。それも水野さんが職を辭すやうになつた其の原因が、何も關係の無いフとなら其で宜いかも知りませんが、彼の人が學藝が出来ないいふのぢやあ無し、怠惰たといふのぢやあ無し、たゞお五十さんに親切にして、信心まで仕た其事が人目に立つて、傍の風評が矢覽に喧ましくなつて、其が爲に職を退いたといふのですから、云はゞ此方の爲に然様いふ譯になつたのですもの、石佛だつて氣の毒と思はずには居られさうも無いところです。それを何様でしやう全然知らん顔で、濟まして行かうといふのです。人間も其の位身勝手になれりやあ澤山だと思ひますは。』

『だつて悪い人なら其の位の事は平氣で仕やうぢあ無いか。』
『そりやあ云つて見ればまあ其様なもので不思議はあります子
いがネ、丁度中に介まつてゐる妾が兩方を見ますとネ、つくづく吾家のお師匠さんを餘りだと思ふ其に連れて水野さんが愍然で恐然で、ほんとに何といふ愍然な人だらうと身に浸みて思ひますは。』

『さうさネエ、まあ愍然で無い事も無いネエ。』

「あらツ、まあ整然で無い事も無いネエだなんて、餘りですは。いくら自分が迷つただから仕方が無いとは云ふも、助かるか死ぬかも知れない病人に對つて、心配も仕て遣る、お金も掛ける、書生さん風の人だのに信心まで仕て、此の節の人の爲さうにも無い觀音様に手を合せるといふやうな事まで爲れ

のは、まあよく／＼の事で無くつちやあ出来ませんは。それだのに其程思つてる人にやあ酷く嫌はれて、そして吾家のお師匠さんにやあ口頭だけで綾なされて、御腹の中ぢやあ舌を出して笑つて居られて、揚句の果に取るものも取れ無い身になつて仕舞ふなんて、そりやあ男兒のことですから胸も潤いでしやうし、氣性も毅然と仕て居るらしい人ですから、まんざらくよくも仕ますまいが、妾が若し彼の人の身だつたら、まあ何様なでしやう。此の先お五十さんの氣が折れて優しくでもなつたら濟みも仕ますしやうが、若しお五十さんはお五十さんで何處までも剛情を張り、お師匠さんはお師匠さんで鼻の尖ばかりで待遇へ行つたら、何程男兒だつて迷つた心持の苦しさは女と異ひも仕ますまいもの、何様なにか泣きも仕ますしやう、恨みも仕ますしやう、口惜がりも仕ますしやう。恐然に彼の人は云はゞ清玄見たやうなものになつて、終局にやあ段々との行掛づくから、何様な怖ろしい恐い場に行き着かうも知れませんが。よし然様なつたところでお五十さんやお師匠さんは、身から出た錆だから仕方が無いとしても、別に何も悪い事は仕ない彼の情の厚い、正直な、生無垢な、彼の前途が有りさうな彼の人が……見す／＼一人廢つて仕舞ふのは惑然ぢやあ有りませんか。ネエ姉さん察しの宜い姉さんに其處が解らない事はありますまい。悪い事も仕ない人が見す／＼人一人廢りさうな、それが愨然で無い事はありますまい、ねエ姉さん。』

情激してやお龍が面はや、紅くなり、其の眼は濡れ色を帯びて異しく光を増せり。

其十七

『そりやあもう屹度お前の御云ひの通りだよ。そのお五十さ々といふ人やお前の御師匠さんが、いつまでも／＼然様いつた調子で居りやあ、それほど迄に思ひ込んだ彼の水野つていふ人の落ちて行く前途は知れて居るよ。學問もあるといふ人の事だから、まさかに無分別沙汰も仕まいけれどもネエ、彼の人若出人かなんかだと、それこそ怖しい事にもなり兼ねない話だよ。』

「然様ですとも、ほんとに。もし彼の人が無茶な人だつた日にやあ、随分刃物でも持ち出し兼ねないとおもひますよ。さうす

りやあ差詰め吾家の御師匠さんが目ざされる人ですネエ。』

『あ、さうとり。お前の御師匠さんといふ人は小な恐い人な
んだけれど、仕方が餘り罪な仕方だからネ、随分麟切で二かれ
る位の事は出来ても是非が無いよ。』

「ですか彼の人が無茶な人で無だけに、何様間違つたつて下
らない事なんかは仕やしますまい。百のものならまあ九十九二
ではぢつと堪へるるだらうと思ひますが、何處までもぢつと堪へ
て獨りで舌しんで、思ひ死に死んで仕舞ふまでに穩しく仕て居
やうかと思ふと、分別や堪へ情有有る人だけに猶の事氣の毒で、
ほんとに何といふ恐然な人だらうと思はずには居られません
それでもまた彼の人か困らずにでも居たら、同じ胸の苦しい中
でも氣の樂なところも有りましやうが、職務は無し、身體は閉
なり、懐中合は悪し、差當り段々困つて來るといふところで、
其の困るやうになつた原因のお五十さんは情無いし、お師匠さ
んは薄情の地金を露して、一昨日お出といふやうは挨拶を仕な
ら、彼の人の胸の中はまあ何様になるでしやう。火水が一終
になつたやうになつて、居ても立つても居られやしますまい。
ですから妾が吾家の御師匠さんの子とか姪とか、何か親谷のも
ので、も有るのならば、よしんばお師匠さんと論争を仕ても
お五十さんを與るとか、恩返しをするとか、何の道にせよ彼の
人の立つ瀬のあるやうに、何様にか仕て遣るのですが、お師匠
さんと妾たあ他人同士、養女になれ養女にするつて此頃ちや大
切にして優しくは仕て呉れても、此方あ食客てす、論争ふまで
にやあ何も云へません、また論争つたつて無益なのは知れて二
す。ですけれど御師匠さんの代になつて行つて、彼の人と知り
合になつてから、いろ／＼のいきさつを聞いて一々知つて見る
と、妾あ眞個に彼の人が氣の毒で／＼、お五十さんていふ人が
小二らしい位に思つて居たところへ、これこれで職も無くなつ
たといふ話を聞いて見ると、ハア然様ですかと云つた限りにや
あ出来無いやうな氣もすれば、何だか知らん顔で打棄つて置い
ちやあ不人情のやうな氣もするんですよ。で、姉さんが口さへ
きいて下さりやあ必定譯は無い事、多勢の人をお使ひなさる筑
波さんところで人一人位に授けて下さる職の無い事は有るま

からと、然様思つて、それで餘計なおせつかいか知りませんが、御願ひに來たのです。一體ならば吾家の御師匠さんが出來ないまでもかういふ苦勞を仕て見なけりやあならない處なので、妾が爲るのは出過ぎても居まじやうが、お師匠さんはお師匠さんで澄まして平氣で居ても、妾あ妾の苦勞性で安然としちやあ居られなくつて、斯様して出て來て姉さんに縋るのです。まさか如是だけに細い理由を御話仕たら、そりやあお前詰らないよ。云つても下さいますまいが、ネエ姉さん、妾の慾得で御願ひをするのぢやあ無いし、姉さんだつて彼の人を惑然ちや無いとお思ひなさるやうな事は有りやあ仕ますまいもの、お願ですから妾の所思の無にならないやうに仕て下さいな、ねエ姉さん。思ひ入つて頼み聞ゆるお龍を優しき眼して見居たるお形は、先刻より今に至つて猶未だ費の毛の一筋をだに動がさず、端然よして坐りたるまゝなり。

其十八

お形は其の美しき手に手始の縁を撫づるとも無く撫でながらいと靜に口を開きて、

『お前の云ふ事は、よく分つたよ、だがネエお龍ちゃん。ノ親しげに呼びかくればお龍も、

『ハア』

と甘ゆるか如く軽く答へてお形を見つ、我が姉の如くに頼み思へる人は何と云ひ出づるならん、多分は我が頼みを聞いては二る、ならんがと思ひながらも、だがネエと云へる發語に、少し氣造氣味の、心配らしき眼して他の眼を見たり。

『成程お前の御云の通り水野つていふ人も二然だし、お前の御師匠さんていふ人の仕方も悪いがネエ、お龍ちゃん、お前が何も彼のお師匠さんの眷屬といふのぢやあ無いし、又深い關係のある免れない仲といふのぢやあ無いし、お前が彼のお師匠さんのところから身さへ引いて終へば、其の話あ全然お前にやあ飛沫も飛んで來ない話になつて仕舞つて、たとへ何様な喧嘩が始まるにしても泥仕合が始まるにしても、彼方が彼方だけ何様にでも遣り合つて居やうつていふ譯ぢやあ無いか。彼方同士あ一團になつてこんがらかつて居る絲だよ、お前は其一團の

中に入つては居てもこんがらかつては居無い引張ればする

りと■けて仕舞ふ事の出来る絲だよ。だから早い話を云やあ汝が其のこんがらかりの一即の中に入つて、氣を使つたり目を使つたりしてまごついで居るよりやあ、するりと■けて仕舞つた方が何程好いか知れないよ。譯は無いやあネ、妾のところへ來てお仕舞ひな、以前のやうに妾のところを長閑に仕て、小説でも讀んで遊んでおいでが宜いぢやあ無いか。彼のお師匠さんていふ人が何かぶつく／＼云つたにしても、金錢のぼつちりな與りやあ尾を振つちまふ人だらうから、何もむづかしい事は有りやあ仕無いはネ。お前の爲の好いやうになら何様なにでも仕てあげるつもりなのだし、お前の身の上に就いちやあ妾も些考へてる事もあるんだし、又何處までも引受けて世話を仕度といふ道理も有るんだからネ。決して悪い事は云はないから■けて仕舞つたら何様だエ。第一お前の話でも分つて居るお前の御師匠さんネ、そんな可厭な人と一緒に居て末々はお前何様仕やうつて氣なのだエ。お前程にも無い、分らないぢやあ無いか。

『そりやあもう段々と彼の人の御腹の中が讀めて來て見ると、到底末長く一緒になんぞ居られる人ぢやあ無いのですし、妾に仕た前々の所行も此頃になつて見りやあ、合點の行く恨めしいことが澤山あるのですもの。ですから表面こそは奇麗にして居ますが、些も一處に居たい事なんか有りやあ仕ませんの。ただ、今直に何様思つたからつて思つたやうにもならない身だもんですから：：。』

『それで彼家に居るとお云ひのかエ。それ御覽、彼の人は前つから妾が推量した通りだつたらう、云はない事ぢやあ無い。だから今お前をぢやほや云つて家に置いて居る料簡だつて、

『つまり妾を猿廻しの猿にして、自分が食べやうつていふ腹なんですよ。その位の事は妾だつて、氣のつかない程人が好くももうありませんからネ。それを何時までも小兄かと思つて、馬鹿にして居る氣の御師匠さんの仕方によあ腹が立ちますは。』

『ホ、ホ、ホ、澤山苦勞をお化だつたから、前のお龍ぢやんぢやあ無いものネエ。だが然様知り切つて居てそれであどけ無い風を仕ておいでのなんざあ、お前の方がお師匠さんよりも人

の悪さが一枚上ぢやあ無いか知らん、ホ、ホ、ホ、ホ、

『ホ、ホ、ホ、ホ、だつて妾あ、あんな眞の悪い■い人にだから然様して居られるのですは。善いとおもふ人に對つちやあ此○ばかりだつて作り飾りは仕やあしませんよ。』

「ホ、ホ、ホー。い、よ。誰もお前を眞個に悪い人におなりだつて云ひや仕ないから。で、さういふわけなら猶の事ぢや無いル。一日も早く其様な人と一つ御釜の御飯を食べあつて縁を深、する様な事を、仕無い様に仕た方が宜からうぢやあ無いか。

「そりやあ其の譯はもう能く分つてますが、ぢやあ、姉さんの心持ちやあ水野さんの事は、まあ一體何様したら好いんだと御思ひなんでしやう。構ふ事は無い、何も彼も抛つてお仕舞ひと御思ひ。』

此は恨むるに似て云へど彼は感ぜざるがごとし。

『一體水野つて人は彼りやあお前の何に當るのだエ。』

『……………』

『お前あの人に其様なに肩を入れて何様仕やうつてお思ひのだエ。』

『……………』

『考へて御覽、餘り詰らな過ぎるぢやあ無いかエ。』

『：だつて姉さん。』

『だつてぢやあ無いよ。え、お龍ちゃん、妾あ何だか意地の悪い事を云ふやうだがネ、よく考へてごらん。どうだエ、それ、お龍ちゃん。』

『：だつて姉さん、』

「い、え。だつてぢやあ有りまとんよ。能く考へてごらん。詰らない事は終局まで行つても矢張り詰らないよ。』

「だつて姉さん…。だつて姉さん…。でもそれぢやあ餘り恰俐過ぎて薄情ぢやあ無くつて。』

其十九

お龍は自己が身の凡てお形に及ばざるを知れるなり。第一今の身の舟遇は掛けても及ばざるを知れるなり、有つて生れたる容貌ももとより及ばざるを知れるなり、智慧は特さらに及ばざるを知れるなり、讀書筆札も二年三年苦しみたりとて及ぶべきに

のらず、挿花茶湯はいふまでも無く、我が最も好ける絲竹の道、彼の最も悦ばぬ縫針の道に掛けてすら猶且及ばず、随分人に向け負くる嫌ひの、何事を仕ても人後には立つまじと思ふ身ながら、何事を仕てもお形には及びかぬるを知りて、心の底の底より深く深く尊び敬へるなり。されど唯一つ、情合の深き浅きといふ事のみには掛けては、ひそかに姉と頼むお形にも譲らざる心地して、我は何ぞの折には慾も得も何も彼も棄て、舞ふ馬鹿なり共、彼の人は恰憫だけに同じ其の時に然様は爲まじき人と、却つて流石に崇め慕へる其人をも、聊か物足らず飽かず思へる味さへあるなり。

されば今お龍が云ひ出でしは、もとより率然の語なれども、音を用ひざる其の僅少なる語の中に、お龍はおのづからお龍の氣性の、然ばかりに崇め思へるお形のためにも枉げられず屈せられぬものあるを露し出して、抑へんとして抑へかねたる不服の氣を我知らず洩らせるるなり

お龍の持前を知りきつたるお形は、走り來れる矢を幕もて止なる如く、柔軟なる語氣に却つて問ひ反しぬ。

『薄情ぢやあ無くつてツて。何故またネエ。』

『何故つて、姉さん。そりやあ妻さへ退いて仕舞へば妾の身の好いのは知れて居ますが、それぢやあ彼の人とは否運まんまで遣るので、矢張り彼の人とは愍然ぢやあ有りませんか、ですから其れぢや薄情になりますはネ。妾あ詰る詰らないは何様だつて好いんですよ。妾あたゝ彼の人が愍然だから何様か仕て遣りたいつて云ふんぢやあ有りませんか。』

『い、え、お前の心持はもう悉皆解つて居るのだがネ。妾あ又ただお前の朋友で、お前の利益になる事を仕てあげたいのだから。い、かエだから妾あ前途の前途まで考へるので、お

前の詰る詰らないを關はないなんて、そんな事は出來ないよ。

『でも詰る詰らないで云やあ、何だつて詰らないは。妾みわやうな種々な目にあつて來たものは生きて居るのからして詰らないは。何様せ妾が彼の人を愍然だから何様して遣りたいと思つたつて、結局妾にやあ何にもならない詰らないなあ知れてますは……。でも妾の氣が届けば妾の心持は宜うござんす

は。知らん顔で済ますなあ薄情なやうな氣が爲ますは。」

『オヤ、妾あ爲なくちやあならない事を爲ないのが薄情つていふものかと思つて居がが、お前のは爲なくとも濟むことを仕無いのには薄情といふのだネ。』

『爲なくちやあならない事を仕無いのは、そりあ不義理ですは、爲なくとも濟むことでも、爲てやりやあ他人の利益になる、それを爲ないのが妾あ薄情かと思つて居ますよ。』

『お龍ちやんのやうに云つた日にやあ、お誰ちやんの他の出間の人は悉く薄情者のやうになつて仕舞ふよ。ホ、、、まあ其りやあ何様でも宜いが、それぢやあ詰つても詰らなくつても水野つていふ人は妾が引受けて何様か仕てあげるとすると決めて置くがネ。』

其二十

『ぢやあ姉さん、ほんとに受合つて下さるの。』

お龍の眼は既に罪に無く悦びて笑めるなり。お形は其の様子を見て却つて微に愁ふる色あり

「ある。彼の人が困らないやうにするだけの事なんぞは、旦那に云ふまでも無い、妾か何様にでも必定爲てあげるがネ。お龍ちやんは又何だつて然様彼の人の事に肩を御入れのだらう。」

『だつて姉さん終然なのですもの。』

『たゞ愍然だつていふばかりで。』

『ハア然様ですは。』

『全くだ。』

『いやだ事ネエ、何だか異アしく御聞きなさるのネ。』

面は漸く不安を現し、言は忙しく其の問を遮り止めんとしたり。お形は口のはとりに見ゆるか見えざるかの笑を浮めて、猶追して已ます

『もしやお龍ちやん、お前、あの人好になつたのぢやあ無くつて。』

『エ。』

「ひよつとしたらお前、胸の底ぢやあ彼の人を思つてるのぢやあ無くつて。』

眼の上に白刃を閃めかさるゝが如く、一語は一語より急に逼り

立てられて、お龍はさつと面を紅くし、

『あら姉さん、其様な事を云つちやあ妾あ嫌ですよ。妾やあ基様な氣なんぞを些も有つて居やあしませんは。』

と、明らかには答へたれど、驚き慌て狼狽へてどきまぎせる熊はありくくと見えたり。お形は此度は婿然と笑をつくつて、

『必然。』

と重ねて問へば、お龍は既浮き足を踏堪へ身構へを仕直して、

『だつて、知れきつてる事ぢやありませんか。彼の人はお五十さんていふ人を思ひに思ひぬいてるのですもの、横合から妾が思つたつて何様なりまじやう。いくら妾が馬鹿だつて酔狂だつて、其の位の事は知つてますから、空店へ郵便を抛り込むやうな事を何で爲ますものかネ。ホ、ホ、ホ、ホ。』

と戯言まで云つて自ら笑つて何氣なき態なり。お形はお龍の言を信じたりや信ぜざりしや知らず、

『然様かエ。そんなら何も既云ふことは無いのだがネ。妾あ又、お前が彼の人を好いてでも居るといふことなら、次第に依つちやあお前の爲に一ト苦勞して、お前の身の收まりの好いやうに仕てあげやうかとも、初手にはふつと思つたのだよ。』

『エ。』

全然おもひの外なりし言葉にお龍は復驚かされつ、我知らず心を動かして答さへ答へ鈍りしが、お形は早くもその眼色を見て取りたり。

『だが彼の方は彼様だし、何様なものだらうかと思つて居る中また別に一條の話が出て來たので、お前の爲に彼の方は棄てス者に仕た方が宜いと決めて居たところ、丁度お前も左様いふ氣だと今聞いて妾も安心したよ。さうで無けりやあ彼の人を思つたつて詰らないといふ事を云はうかと思つて居たところだよ。』

其の云ふところは假設にや實際にや、お龍はたゞ我が心の蜘蛛の秀に■められ行れて、抵抗はんに抵抗ふべき力の入れどころも知らぬ中、次第々々に自由を奪はれ奪はるゝが如く覺りるの

『ネエお龍ちゃん、仕様が無いやネ、あ、いふ人は。お前彼の人を何様いふ人だと思ひだエン。なる程情も有らう、正直でもあらう、學藝も出來やうがネ、一生の所天にするにやあ、氣

むづかしやで、貧乏性らしくつて、へち頑固なところが有つて、彼あ餘り有り難くは無き、うだネ。といつて情夫にするにやあ、容貌が悪かあ無いが愛嬌の足りない、面白味の薄い、無粹の、世間を知らな過ぎる、何様もお前の相手にやあ些不足な男ぢやあ無いか』

其二十

お龍はお形の水野を評するに平らかならねども、反駁さんも何と無く後見らるゝ心地せしが、其の言ふところ多くは當れるを如何とも爲る能はず、たゞ僅に、

『あら姉さん。てんで妾あ全然其様な事を思つてや仕無いのブすから、彼の人が貧乏性だつて無粹だつて何様だつて宜いぢや有りませんか、不足でも過ぎて居ても關係の無い事ですは。蹄分酷い事ネエ、姉さんの言も。

と、知らざるを粧ひて我には聞き辛き談を少しも早く外さんと化たり。

『然様さネエ。ホ、關係の無いものを兎や角いふのには當らないのだがネ、此あまあ無意の話だと思つて聞いて居て御覽よお前はどうせ彼の人を何様の彼様のとなんぞ思つては御いで。無いといふのだから、別に何にも心配は無いがネ。こゝに氣が優しくつて而して二氣のあるやうな若い女があつて、何様かした心の機勢から彼の人を思ふやうなことが有るとするとネ、早く氣がついて引返して仕舞へば其限で濟むけれども、田舎道なんか歩いても能くある事で、二十丁三十丁も間違つた路へ踏込んで仕舞ふと、あゝ間違つたと氣が付いても後へ返る氣にはなれないで、何様かして出抜けやう出抜けやうつて云ふんで餘計變な路へ入つて、下らない苦みをする事が得て有るものだが丁度其様な譯で下手に人を思つて、少し宛少し宛深みへ入つ行くと、終にやあ飛んだ目を見無けりやあならないやうな、馬鹿なところへ行つて三當りもするよ。何でも前途の知れない怪しい路へ入つたら、一二丁しか歩ない中に立止つてネ、ぶつと考へるか人に聞くかして、引返すのがまあ肝心で、無暗に歩いて行くのは一番危い事だよ。彼の水野つていふ人は一ト目月でも分る、性は良い、眞人間だよ、不實な人ぢや無いだから

彼の人が別に人を思つてるので無けりやあ、彼の人を好いたといふ女が有りやあ其りやあ好たで宜いのさ。而して其の女の思も屹度彼の人に分つて、小説ならばまあ芽出度芽出度といふところにもなるるだらうがネ。彼の人が他の人を一心に思つてるからにやあ、性の良い人だけに傍からの思ひは受け付けまい、眞人間だけに二心は持つまいよ。然様すりやあ彼の人を思ふなあ死路へ向つて行くやうなもので、行けば行くだけの草臥儲はたから、そんな路へ若し一寸でも歩が向いて居たらば、其方踏込んだか踏み込まない中に後へ引返して仕舞ふと、然程苦にもならない、損も仕無いで済むといふ譯なのだよ。誰しも損路を仕ないで世の中を歩いて来るものは中々無い。お前はお知りでないが妾だつて損道を澤山仕て來て居る。お前は妾も知つてるが既一度甚い冗道を歩いて、踏拔も仕ておいでだし生爪も二がしておいでだし、散々な目にお會ひだつた人だから、今さ、また前途の知れない怪しい路へなんぞ、無暗には入つて御いづでは有るまいから宜いがネ。

お形は云ひ終つて黙し、お龍は聞き終つて黙し、互に言葉の紛えたるところへ、小間使のお春は次室より現はれ、

『あの昨日お來臨なすつたお婆さんの方が御出になりました。』と云へば、

『お、丁度好いところへだつた、此方へと御云ひ。お龍ちゃん、お前、吃驚おしで無いよ。お前の大嫌の静岡の叔母さんだよ。と、お形は笑を含んで云ひたり。』

「其二十二」

お形と我が叔母とは相識なるべき筈の無ければ、此家にて叔母に會はんとは夢にも思ひがけざりしお龍の、主人の言葉を聞きても猶信じかねて、よもやと疑ひ訝かれる間も無く、既お春に近づかれて、身體は一體が小粒なる上に老いたればいと小さく見ゆれど、石の如くこつつりと堅さうに緊り切つたる小さき顔、薄くなりたる郷毛のびつたりと地に緊着ける小さな頭、負ぬ氣が尖つて露れたるやうなる小さき三角の眼、すべて小さきが中に毫も緩みの無き、我が叔母のお近は忽ちに現はれたり監の味噌漉縞の衣を襟元窄く着て、疊み皺見ゆる黒の紬の羽鮮

に、古ねて堅くなつた茶の細紐を少し胸高にきつちりと結び
妙に角張つて坐つてしなやかならず挨拶せるさまは、何様見て
も静岡の在より出で來りたる田舎婆と見えて律義^二し。されど
明治の初年に兩親に連れられて、東京を^二れしま、茶圃^二麥^二
の間に離斷として年を取りは仕たれ、根からの田舎者ならぬに
言語だけは然のみをかしからず

「何様も昨日はまことにお喧しうございましたらう。老年では
ございますし、我張り婆ではございますし、それに田舎に居り
ますので自然と馬士かなんぞのやうな大聲になつて仕舞ひまし
し、自分の勝手ばかり饒舌り散らしましたから嘸御迷惑でござ
いましたらうと、是でも又殊勝らしいもので、後では御氣の毒
に存じましたのでございますどうも種々何や彼や御深切さず
に有り難う存じました。それに御馳走にまでなりまして、夜に
までお邪魔を致しましたりなんぞして、まことに既年甲斐も無
い自分勝手ばかりの婆だと、御蔑視のところも御羞しうござい
ました。若し萬一さてく、勝手者だと御愛想盡かしも有らうか
と、宿へ歸りましてから些心配致しましたが、ナアニ馬鹿にや
あ恰恠な方の事は分らなくつても恰恠にやあ馬鹿なもの、事は
能く分るだらうから、此方の何程か有り難く思つて居る位の事
は御分りだらうからまあ安心だ、屹度馬鹿婆だけれど腹の中は
人並だ位には思つて居て下さるらうから、と斯様まづ勝手に
決めて仕舞つて、安堵いたのでございます。ハ、ハ、何様か御
恩には必らず着ますから宜しく御願ひ申します。では此女に
もう貴女様が今日お招び下さいましたので^二
と、人の云ふ事は餘り聞かずに獨りで饒舌つて、お形には語を
挿む間をさへほとく與へざるほど、身體には似合はず大な頑
健なる聲もて先づ語りたり。

其二十三

お形はお近が言へる間にも、少しの受答へを爲つ、語を挿まく
とせざるにはあらざりしも、立板に水とはいふべきならねど下
り坂に走る小車のやうに騒がしく忙しく話しつづけられて口を
入れ兼ね居しが、今斯く問ひかけられて僅に言葉を出し

『い、え然様ぢやありませんが他の事でもつて、丁度自然に

先刻方見えたので、』

と云ひかけてお龍の方を莞爾やかに見やり、

『お龍ちゃんお前、黙つておいでぢやあ不可よ、叔母さんぢやあ無いかネ。』

と輕き一句を與へつ、またお近に向ひて、

『きまりが悪いもので差澁んで困つて居るのですよ。ホ、
だ若くつて、いつそ可憐らしいぢやありませんか。どうかまあ今日のところは御叱りならないでネ、貴卿が御目上ですか
ら優しく仕て御與りなすつてネ。』

と、二人の間をば取り繕ふやうに云へり。

此の叔母が擇み定めし婿を嫌ひし、朝となく夜と無く論ひ合ひ睨み合ひて、さらぬだに性の合はぬ中の、いよくおもしろからず、え、あた忌々しい、何となるものぞと、後の迷惑も思はずに無言つて駈け出したるまゝ、恩のある事は知つて居れど、
らしきもあるに、手紙一本も出さで知らぬ顔に濟まし來りし今日、
然に此處に相會ひてはお龍も聊か驚きつ、顔を見ては流石氣の毒さに面伏の思ひもすれど、勝手のみ強くして遠慮を知らぬ性急の話聲の、いつもながら喧しく耳に響くを聞きては、もう薄腹の立つほど蟲が嫌つて厭でく堪らず、出ずとも可い人が出て來てと迷惑がりて、出るも引くもならぬに心そげて居たりしが、お形に斯く云はれては横を向いてばかりも居られず、不承々に、

『叔母さん……』

と云ひし限り、あとはぐずぐと口の内にて何を云ひしやら知れず、術無げに頭を下げて漸と挨拶すれば、叔母はなか／＼も
う黙つては居ず、三角の眼をきらりと光らせ、

『でもまあ能く忘れずに叔母さんと御云ひだつたネ。ハイ、其後はしばらく。お前も御達者で、別に御天道様にも愛想を盡かされずに御暮しで、まあ結構だネ。まことにお前の御蔭ぢやあ恐ろしい沸湯を飲ませられました。會つたら引掬へて耳でも拙り取つてあげて、何の位妾が痛かつたか苦しかつたか、此様なものだつたよと、察して貰ひましやうと思つて居ましたがネ、此方様の御言葉だから堪忍してあげる。しかし彼の事は何様か

此様が既済んで仕舞つたが、一つ濟めば又一つでお前の御蔭様で、斯様して砂塵ばかり立つ東京くんだりへ、田舎婆さんがゑつちらおつちらと得々出かけて来て、此方様へも御厄介を掛けたりなんぞ仕ます。婆さんを苦勞ばかりさせて御手柄の事で

■ネほんとお前の仕た事に碌な事は有りやあ仕ない。お■の仕た事の中で好い事といふのは、此方様に可愛がつて頂いて居るといふ事ばかりだ。此方様にでも見離されりやあお前のやうなものは、それこそ最終は倒れ死だよ。身に染みて覚えておいでなさい、もうお前の身體はお前の料簡ぢやあ勝手にはなりません。妾がすつかりと願つて置きました。もう何も彼も此方様の仰やる通りにするのです。三絃の師匠だなんて、彼様悪い人のところへ、身を置いては決してなりません、出入りしてもなりません。早速これから其家を出て此方へ御厄介になつて、此方様を有り難いとおもつて身を責めて御働きなさい。』と獨り合點して、まくし立て、指揮したり。

お形は訝り疑ふお龍を見て、

『叔母さん、其ぢやあ此の人にやあ分りますまい。かういふ事なのだよお龍ちゃん。』

と靜に説き出したり。

其二十四

最初つから云ふと如是なのだよお龍ちゃん。それ一昨年夏の夏の事だつたね、これこれで此度叔母に伴れられて、厭だけれども静岡へ行きますからつて、お前が暇乞に御いでだつたことがあつた、其時からといふものは随分長い間、此方から手紙をたげても返辭は少しいしたまに御遣しでも極々短つかい眞の義理濟ましだけの事だし、是あ何か知らないけれども甚く氣を取れておいでの事があるのだらう、と思つて居る中に今年の三■ふらりつと妾の處へ御いでだつたが、顔付に全然變つて仕舞へい、前■見た處女らしいところは無くなつて御終ひだし、様は何だか知らないがそはくとしておいで、妾に御話しの■話にも辻褄の合はないどころは有り、何様り氣になる事ばかりだから妾は心配して、すこし置いて呉れと御言ひのことだからあ、宜いともと、表面は何の氣もつかない風で家へは置いて■

げたもの、何様なにいろ／＼と物をおもつたか知れないよ
此處に居ることを静岡へ知らせては呉れるなど、念に念を押し
ての御依頼だつたけれども、今白状してお前に謝罪るがネ、何
様も物の道理が然様は行かないと思つたので、お前には内密で
もつて静岡の叔母さんへ、これ／＼の様子で、如是々々してお
龍ちゃんは妾の方に御いでだと、妾が全然知らせて仕舞つたの
だよ。』

此まで語り掛けし時、叔母はお龍を見て、

『それ御覽。汝のやうな分らないもの、云ふ事や思ふことばか
りが何で通るものかエ。此方様のやうな方は何程御優しくつて
も、角々は嚴然と道理のある方へ御就きになる。お前は知ふ
ないで好い氣になつておいでだつたらうが、ちやんと妾の方へ
御知らせくだすつて、いろ／＼と御注意まで仕て下すつたのだ
七分通り八分通り話の定つた婿を嫌つてお前には出られる、何
處へ行つたかかいかくれ知れず、また短氣を化て若しや淵川へ
でもかと、何程妾が苦勞して困り抜いたか知れない、其處へ此
方様からの行届いた御手紙で、やつと胸の凝塊がすこし下つた
居所は知れたし、引捉へてとも思はないでは無かつたが、何様
せ其科嫌つて居る婿ならば、仕方がないからいつそ破談になよ
つたが宜からうし、破談になさるなら又當人が其地に居ないで
何處へ行つたか知れないといふ分になすつた方が、事か濟み易
からうし、若し強ひて無理な事をなさるやうでは當人の爲にも
却つてならないやうな事になりは爲まいかと思はれるから、次
第によつたら姑く此儘御預かり申しても宜い、と能く分つた出
方様の御親切な御仰ありやうでもあり、また此方様の御噂も準
て聞いて何様いふ方かと合點しても居たので、とても妾には制
道の就きません我儘者でございすから既諦らめました、御甘
え申しては濟みませんが然様いふ譯でございすれば、此方の
話も解けて濟んで仕舞ふまで御預かりを願ひます、成程今妾が
出て參りまして當人に會つても何にもなりますまいから、御迷
惑でもござりましやうが其では何分宜しく願ひまする、若し
常人が不心得なぞを致して、御厄介を掛けまするやうなことが
ございすれば屹度引受けまする、と斯様いふ御挨拶を仕て願

つて置いたのだ。今解つたかエ、妾の心持も此方様の御思慮も。それはど妾にも此方様にも人知れず氣を揉ませて置いて、それだのに何だエ、月日も経ない中に又此方様を駈は出して、妹のやうに思ふ子のやうに思ふとまで云つてくださる此方様の御親切も、妾はお前の眞實の叔母だけれども然様は濃かにお前のための思ふことは出来ないと我の折れるほどに仕て下さる右り難い此方様の御恩をも全で餘所にして、何が不足で無言で三終の師匠だなんて彼んな悪い奴のところへ行つた。これ、何於此方様を後にして稽古所なんぞの手助けを仕て自墮落に暮したのだエ。彼女あお前、お前に碌でも無い男なんぞを取り持つ狸婆ぢや無いか。性凝りも無く、まだ浮氣が仕たくつて、術様な奴に末始終は食はれるのも知らないで、此方様を出たのかエ。猫。いやらしい猫し、ほんとにいやらしい猫。猫だへて畜はれた恩を三日経つてから忘れる、汝あ畜はれて居て可乙がられて居て即時に忘れただ。妾にも然様だつた、此方様にも然様だつた。お前のやうな好い姪をもつて人様の前で、妾あほんとに肩身が廣ぐつて何様なにか嬉しいよ。』

其二十五

然様いふ氣性の人と思へば腹は立たぬながら、理由も知いず唯一二に猫よ畜生よ猫にも劣るとは何程叔母様なればとて餘りな○言葉。静岡から唯一つの頼にして出て來たほどの此家を無言で出たのは、よくく口惜しい悲しい事の有つたればこそ、牛きて復顔を見たり見られたりする氣が些でもあつては、お形さんの親切を餘所にして、何様して彼事な事の出来るものではない、全く二い源を殺して自分も死んで仕舞ふ氣で、濟まないことは悉皆冷くなつてから謝罪る積りの、遺書さへ身に着けて持つて居て此家を二けて、出會つたが最後一發と思つて居た其は其の事無くて其の意の見えずに濟んだゆゑ、たゞ勝手淫奮の心から彼様なところへ行つて、身を自二落到稽古所に置くよ思はれても仕方無けれど、自分の姪を其様なに悪いものにして罵罰せば何が面白いのか、辯解すれば又男を二さうとした叔母の知らぬ一條の談を、こゝで新規に仕出さねばならぬ故、知ら

ぬを幸ひにして黙つて悪く云はれて濟ませば、それで濟むこしと濟ましも仕やうなれど、餘りといへば同情の無い、我ばかりの人と、私に口惜く思ふか眼さへ枯ませて、お龍は小さくなりしま、咳嗽一つせず、たゞ頸垂れて凝然としたるさまは、首の座に直れる罪人の罪状讀まるゝを、何と詮方も無く聞き居るにも似たり。

「其様なにまあ苛いことを仰あらないでもの事で、お龍ちゃんか妾のところを出て彼家へ行つて居るやうな經歷になつたのは、いろ／＼の理由もあることで我儘ばかりぢやありません。それは濟んで居るこゝだから何様でも好いとして、此度叔母さんが此地へ出ておいでの、お誰ちやんお前の今居る家の彼の御師匠さんネ、彼の人がお前を呉れると叔母さんのところへ、何だか變に搦んで云ひ込んで行つたといふ其から事が起つただよ。」

「ほんとにお前は何處迄人に世話を焼かせるのだから数が知れない人だよ。お前が此方様に御用介になつて靜穩しくさへ仕て居れば紛紅の無いものを、性の知れない人の世話になんぞなるかり、下らない苦勞を無益にさせられる。此方様の御音信で汝の様子も大抵は知つて居たか、此頃になつて汝の師匠といふ人から、何でもお前を貰ひ度いからとの再々の云ひ込みだ。こりよく御聞きなさい。一體ならお前のやうなものは遣つて仕舞と方が苦勞拂ひだから、鯉節でも付けて遣つて宜いのだが、見す見す食物になつて仕舞ふ前途が見えて居るから、然様はなりせせんといつて挨拶したら、まあ何といふことだらう、直に狼物の本性を出して、長い間御世話を仕て居た費用がこれ／＼だ、お龍さんを下さらなけりやあ御立替を如何かなすつてと、吃驚するやうな法外のお金を妾から取らうといふだ。人を田舎婆に仕て小馬鹿に仕たつて、野へ出ても座敷へ上つても人にやあ負けない婆だ、先方が然様出るなら、此方も出様がある、お龍は妾の妙だ、妾が連れて歸ります、お龍に御注ぎ込みなすつかのは汝さんの御親切様だ、妾あ些少でも御恩になつた覚えはありません、何も誘拐を御商賣にやあなさりますまいから、人の妊棚に指を御さしになる事は有りますまいと、お前を拉去いて

大手を振て静岡へ歸つて、何様な顔を仕て膨れるか見て遣らうと思つて、東京の生狡い狸婆の皮をニく氣で出て來たのがネ。』と、面前にでもお關が居るやうに怒り立つて力んで云へる語爲面色、なか／＼當り難くあしらひ難き婆なり

其二十六

『だがお龍、お聞きなさい、妾あ敵手が角で向つて來りやあ此方も角で向つて行くけれど、お前のやうに眞になつて世話を仕て呉れる叔母にも自分の勝手ぢやあお尻を向けたり、折角優しく仕て下さる此方様をも時の都合ぢやあ袖にするやうな、其様な自分勝手ばかりは夢にもしません。お前は何ぞに付けちやあ、叔母さんは無理壓制だ、頑固だ、自分流義で何でも押しして行かうとするお龍云ひだが、そりやあ頑固でもあらう、自分流義でもあらう、然し思は恩、仇は仇でちやんと記えて居ます、お前のやうに恩も仇も見さかひの無い事は妾あしません。だから今そのお關つていふ奴のところへ押し込んで行つて、田舎婆は田舎婆だけの意地も有りやあ根性つ骨もニ張つてゐるところを見せつけて遣つて、間違つたことは云はない妾だもの何負けるものか、思ふさまニぢ合つてニぢ合ひ抜いて、勝問を吐いて歸らうと思つたが、まづ其の前に此方様伺つて、段々御世話になつた御禮も云つたり、またお前が我儘に此方様を出て御親切を無にした御謝罪も仕たり、一應は此方様の御思召も伺つてからそれら争り合ふなら争り合はなくつては義理が悪いと、それでニ掛けに此方様へ伺つて、御尊にばかり伺つて居た方にはじめて御目にかゝつたのだよ。ところが、これお龍、お聞きなさいよ。道理に違つたことを云は無いものは何處にでも味方がにります。いろ／＼とお前のことを御話し申したところ、悉皆妾の云ふことを道理だと仰あつて下さつて、お前は何ぞの時には此方様を楯に取つて、妾の云ふ事を肯くまいなんぞと思つてスか知らないか、もう然様は行きません御生惜様、何様して何様して判然と物の道理を御見分けなさる此方様だもの、可憐からつて御前の味方にはなつて下さらない、すつかりと既妾の味方になり切つて下さつたのだよ。彼様なところに居るのな々ぞは全くお前が悪い、と散々に仰あつて、彼家を出させるやう

にとの御思召なのだ。然し何も態々とムキになつて悪い奴を相手に争ひ合つても仕方が無からう、お前が彼の御師匠さんていふ人の腹さへ解めたら彼家に居やう氣も有るまいから、力をくれてお前を腕ぎ取りに行かなくつても濟む譯だ、と仰あつて下すつたから、成程と妾も思ひついて、何も老年が皺つ顔へ筋を立て、喧嘩しすとも濟むことならば、と狸婆の面の皮を拗りに行くことだけは思ひ止まつたが、』

此處まで語れる時、お形は後を取つて、

『で、ネエ、お龍ちゃん、叔母さんも實のところは、お前を直に前のやうにまた連れて歸つても、何様も田舎の人は嫌ひだなんて云つて取つて遣る婿を嫌ふやうでは始末が着かないから（て、あぐんで居らつしやるのだから、そこで妾が叔母さんに對つて、何様にでも彼様な可厭な人の傍からお龍さんを離して御仕舞ひなさるのは其りやあ宜うございませうが、それもお龍さんが彼の御師匠さんの腹の悪いのを自分から氣が付いてで無くちやあ可けません。それから田舎へ連れて御歸りなさるのも矢張りお龍さんが其の氣にらなけりやあ、未始終が詰りますまい。妾のところへ來て氣樂に遊んで居るのが一番お龍さんの利益だとも思ふし、又妾が此様な境遇で居ながら立派な口をきくのでは夢更無いけれども、其の中には未々のお龍さんの身の收まりも妾の分別や力て出来るだけは仕て上げたいとおもひますが、これもお龍さんが妾のところへ來て居るのを嫌つちふあ仕方は無いし、若し又餘所の堅いところへ奉公住みでも仕やうといふやうな氣でもあるなら、それもお龍さんの料簡次第だし、又些は遅けれども此節柄の事では有り、學校通ひでも仕て、何でも女一人で人の世話にならずに遣つて行かうといふのなら、それも其で妾の手で三年や五年は蝦茶袴さんで過させても上げたいと思ひますから、何事も無理壓制は可けません、ようく當人の所存ももゆつくりと聞いて見て、其の上で何様ともする方が宜うございます。お師匠さんといふ人にやあ、お金を遣せなら遣つても宜うございますが、餘り仕方が惜いから、お金は惜くは無いけれ共奪られるのは業腹です、お龍さんの心次第で、何様とも仕て遣りませうつて、斯様いつて妾あ御挨拶を仕たの

だよ。』

と、張りも弛みもせぬ例の調子に述べたり。

其二十七

『解つたかエお龍、まあ何といふ有り難い御優しい御思召だ。』
う。小兒の時から可愛がつて下すつた上、お前は御恩に負いて
狗猫のやうな事を仕ても、別に愛想づかしも仕て下さらないで、
お前が稽古事を仕たければ其も爲せて遣らう、家に居たいなら
家に置いて遣らう、末々の身の終局も頼むなら心配して遣らと
と、斯様なに親切にして下さる方が何處にあると御思ひだ。且
く料簡を入れかへて眞人間になつて、しやんと女は女一人だは
羞かしくないやうな今日の送り方をする身になつて、御恩返し
は出来無いまでも御親切を無に爲ないやうに仕なければ、叔母
の此の妾にやきもきと幾干の苦勞させる、其の罰はよしんばお
前に當らない迄も、此方様の罰が未始終は屹度當つて、お前は
碌な死状は出来ますまいよ。花が奇麗だ、蝶々が可憐い、人形
が氣に入つたなんぞと、其様な下らない浮々としたことを云つ
て居て過せるものぢや無い世の中だから、宜い加減に目を覺ま
して確乎とした氣になつて、片目でも跛足でも構はないから食
ふに困らない男を持つて、そして子でも生んで末の安堵を見る
やうに仕無くつては濟む譯ぢや無い。自惚れて居たつて可け
は仕ない、情夫に棄てられる位の容貌で居て、飛び抜けて何が
一つ出来るでも無い天稟のお前なんぞは、自分で理屈を付けり
やあ理屈も有るだらうが、世界から云つて見りやあ圃中の蠻南
心か茄子か白瓜で、何様せ其邊中にある數物なのだもの、好
加減に熟きた時分に何様かなつて仕舞ふのが當然の事で、早速
と縁のあるところへ行つて一代働らいて、種子でも遺すより他
にいざもござも有りやあ仕ないのだよ。だから妾が其の積りづ
世話を焼いて遣つたのに、何だの彼だのとだゝを_二ねて妾を御
困らせだつたが、其もまあ縁が無かつたのだと其の事は濟まし
て仕舞つたところで。蠻南瓜を眞綿に包んで藏ひ通したつて何
になるものでもない、矢張何様かして片づくところへ片づけて
やつて、持つて生れた役を濟まさせなけりやあなら無いから

_二そこで妾が願を仕て、それでは静岡に連れて歸ることは廢安

に仕まして、御甘え申して濟みませんが何様か此方様で御使ひなすつて頂きたうございます、何でも手や足に戦垢切のきれますやうにこき使つて下さいまして、其の中に破鍋に幾蓋で、彼様な奴ても貰つて遣らうといふ方でもございましたら、此方樽の御鑑識次第で豆腐屋へでも炭■屋へでも何でも宜しうございますから身を固めさせて頂たうございます、と斯様いつて妾が御願ひ申して居るのですよ。もう可けません、我儘は云はせにせん、何でも彼でも妾り云ふ通りに此方様の御世話を御願ひなさい。朝は味いから起きて夜遅くまで、火も焚き水も汲へ、炊事雑巾掛け、何から何まで御奉公人と勵み合つて働かなく（てはいけません。嫌だなんぞと云つても既承知仕ません。さあ丁度宜い、妾と一緒に、判然と改めて今後の御世話を御願ひ御仕なさい。考へて居る事も何も有りはしません。』

其二十八

『然様まあ叔母さんの御言のやうにばかりもお龍ちゃんにやあなるまいけどもネ、ネエお龍ちゃん、聞けばお前も彼の御師■さんていふ人の胸の中が解つて居ないぢやあ無いしするのだから、他のいろ／＼の事は後廻しに仕て置いて。何様だエ、彼家を出ることだけは先あ兎も角も出ると決めては。』

もとよりお關には密に愛想を盡かし居れるなれば彼家に居りたき事は微塵ほども無きなり、且つお形に如是優しく云はれては背かうやうは無けれど、今彼處を去りて離れんは、春の野行きしたる折、圖らずも乗つたる田舎渡しの檻樓舟より振顧り視たる岸に、落ち零れの菜の花のしをらしくも咲きて、歪める茅屋の背門に桃の盛りなる風情などを見出し、とても何時までも眺むべきにはあらずと思ひながらも今少時は目にしたきを、野川の甲斐無く小くて早くも着きたりとして逐ひ上げらるゝ時、猶未練に其の船の中の戀しき様なる心地のして、頓には何とも答へわづらひたり。されども何處から何處まで氣の走るお形に、彼處を去りてはおのづからに水野と縁の遠くなるべきまゝ、其を厭ひて見す／＼悪い人と知れるお關が許に居たがるかと思はれんほども物憂くて、

『そりやあ妾だつて彼家に居たいことは有りませんが、でも彼

家を出てからの妾の行先が定まらなくつちやあ。

と僅に語のみを出して「え切れぬ答をすれば、

『だから此方様に置いて頂くやうに妾が願つて居るでは無いか、分らないネエお前つて人は。』

と横合より叔母は焦曝に焦「ぬ。

『ホ、叔母さん其様に御急きなさらくつても事ですよ。

ぢやあお龍ちゃん、お前も彼家に居たい事は無いのだから、彼家は出ることに定めて御置きで、そして其の次にお前の行く牛を腹一杯に御考へが宜いぢやあ無いか。何日だったか何かの話の序に、妾あ自家が富裕でお嬢様で居られるやうな身なら、晝をかいて一生遊んで居たいと御云ひの事があつたが、今でも若し其様な心持を有つておいで、そして晝でもつて遣つて行かうといふやうな氣でも御有なら、そりやあ其でもつて妾が何様でも仕てあげるが。遠慮無しに何でも思ふ通りを云つて御覽な。晝を「はうといふやうな氣も今ぢやあ無いので、習やあお前は屹度出来る人だよ』

『い、え、もう其様な事は些も思つてやしませんは。これでも自分の天稟が大した上手になれない位の事も分いないほどの盲目ぢや無いのですもの。』

「ちやあ鳴物は一體お前の性に合つては居るし、身に染みてほんとに好ぢやあ有るし、若し音楽でも學つて見やうといふやうな氣なんぞも無くつて。」

『まあ厭ですネエ、人に教へたり人に聞かれたりするのには妾あ餘り好ぢやあ無いんですもの。』

『ホ、ホ、ホ。他にお龍ちゃんの好きな事は無いし。ぢやあ藝事で身を立てやうつて氣も先あ無いのだから、修業沙汰なんかは切御やめなのだネエ。』

『だつて今更、何か爲て一人で何様の彼様の仕やうつていふやうなことも思つては居ないんですもの。』

其二十九

『でも、それかと云つて叔母さんと一緒に田舎へ引込んで仕舞つて、叔母さんの鑑識で持たせて下さるお婿を持つて暮さうといふ氣は無いと再々御云ひぢやあ無いか。』

「そりやあもう然様ですとも。妾あ何様あつても、何だか分らないで牛か馬みたやうに持いでる田舎の人の、御飯を喫べるために生きてるつて云つたやうな其様な分らない人と、一生暮すなんかつていふ事は到底出来ないんですから。』
叔母は堪へかねて口を挿みたり

『それ、それ、其の根性が碌で無い、正當で無いのだよ。傍目もふらずにせつせと持ぎ通すのが上人といふもので、お前のやうに何だの彼だのと下らない事ばかり云つて居るのが間違ひきつて居るのだ。皆誰だつて御飯を喫べるために持ぐのぢやあ無いか。喫べる爲に持が無くつて何様なるものかネ、下らない。だつて其様な大騒ぎを遣つて御膳を食べりやあ其でもつて何が嬉しいの。』

「そんな馬鹿な氣樂なことを云つて居るから皆お前の考は間違つて居るのだよ。人間つてものは三度三度御膳さへ満足にいわだいて行かれりやあ其で結構なので、嬉しいも嬉しくないも要つた事ありや仕無い。お前なんざあ甚い苦勞といふものを仕た事が無いものだから、其様な下らない事ばかり云つて居るんだよ。』

『御膳を食べるばかりに齷齪して死んで仕舞ふのだつて、何程下らないか知れや仕無いは。』

『ホ、、、お龍ちゃんお前が悪いよ、目上に逆らつて。第談話に枝が咲いて仕舞ふはネ。ぢやあお前は稽古事は爲る氣は無し、静岡へは行くまいと云ふし、何様仕やうと御云ひなの。妾の處へ來て妾の遊び相手になつてお呉れの積りなの。』

「……、』

一いエもう遊び相手なんぞと仰あやると直に増長致します、矢張り引遣つて遣ると仰あつて下さいまし。』

『お龍ちゃんが黙つて居ちやあ仕様が無いぢやあ無いか。黙つてるところを見ると吾家へ來るのも厭なの。』

『厭つて事は空末も有りやあしませんけれども……』

『ぢやあ何も其様なに考へてゐる事は有りさうも無いものぢや無いか。』

「ても姉さんのところへ來て居ると……。」

『何か厭な事があつて。』

『いえ、然様なのおぢや有りませんけども餘り叮呼に仕て下さるんで、まるで眞實の妹かなんぞのやうに、御嬢様あつかひ

に仕てくださるので、何だか居辛くつて仕方が無いんですもの。

此の春だつて然様なのですよ。彼の時は彼様した譯で二度と妨

さんにやあ御目に掛らないつもりで出たんですけれども、後に

なつても一つは其の爲に此方へは歸つて來なかつたので。彼の

お師匠さんのところに居ることに仕ましたのも、いろ／＼の事

を云つて引留められるからばかりぢやありませんので。彼家

に居りやあ居るだけの事を爲て報復しますけれども、姉さんの

處に居ますと、何一つ用事を爲るのおぢやあ無し、着物も美麗に

仕て下さりやあ髪から穿物まで氣をつけて下さる、それで三度

が三度とも据膳に對つて、姉さん同様に御給仕をされて御膳を

唄くのは、妾にやあ何だか結構過ぎて濟まないやうな氣がす

のですもの。小間使や何かと一緒になつて何か用を仕やうと

すりやあ、お止し、お止し、不見識だよ、つて姉さんが御止め

なさるのですら、あれだけ御厄介になつて居た中に姉さんの

爲に何か仕たと云つたら、たつた一遍相思鳥の餌を摺つたこと

が有るつ限りなのですもの。何程兒童の時から一緒に寝たりな

んか仕て、姉妹よりも仲好く暮して來たからつて、妾あ姉さん

にやあ縁も由縁も何も無い身だし、そりやあ今が今でも姉さる

の爲になら火水の中へなりと入らうつていふ氣だけは有つて居

にすけれども、今日までのところぢやあ何一つ姉さんの爲に仕

た事でも有るぢやあ無し、ただ甘つたれて可愛がつて貰つて居

たと云ふだけの事なんですから、そんなに好くされるやうな譯

は有る筈が無いので、何様も妾やあ氣が狭小なんでしやうけり

ども氣が咎めてならないのです。ですから、いつそ叔母の言葉

の通りに扱き使つて下さるならば、願つても姉さんの傍へ置

て頂きたいのですけれど、何様も姉さんは姉さんの氣象でも

て然様は仕て下さるまいと思ふと、何も仕も仕無いものを餘り

好くして下さるのが、妾にやあ心苦しくつて居られないのです

から。』

「オヤ、オヤ、お龍ちゃんは大■他人兒におなりネエ。わかっ

だよお前の優しい奇麗な心持は善く解つたよ。何かと思つたら、ボ、ホ、ホ、其様な事だつたの。つい過般までのお龍ちゃんには此様な人ぢやあ無くつて、花簪の大いのお悦びだつた頃といふものは、何を買つて呉れ、彼を買つて呉れつて妾をせびつちやあ、稀に買つて上げ無からうものならブーツとお膨れでネ、夜になつて一緒に寝ても彼方に向いて口一つきかないで、そして足でもつてぼん／＼と妾をお蹴だつたぢやあ無いか。』

『あら厭な姉さんだこと。兒童の時の事なんか御云ひ出しなすつちやあ。』

『ホ、そのお能ちやんがまあ大■にませて、ほんとに遠詰深くお成りのネ。い、よ、其なら其て其の様に爲るから。■

やあ吾家に居ることにお定めが好いちやあ無いか。』

お龍は辭せんとして今は辭する能はざる境に臨みぬ。お關の許を離れてお形の世話になる事の嫌なるにはあらねど、何故にふ前の日と今日とはお形の語氣の異ひて、彼の水野をば悦はぬ氣なるが何と無く心にかゝりて、此の人の許に明日よりの我が自を寄せんことの何かは知らねど窮屈いしき心地して、嬉しかチべき筈の事ながら然のみは嬉しからぬなり。

其三十

色ある蓋のいと艶に美しき電燈の下、上座にお形、や、隔たり下つてお龍の叔母、それよりまた下つて坐れるお龍の三人は今しも夜食の膳の既に引き去られたる後を、心靜かに茶に物語るなり。

二人三様の心の思あれば面の色あり。お龍はおのが頼まんと即ひて來しことは自然と半分は餘所にされて、思ひもかけざりし我が身の上の彼家を出でて此家に居るべきやう定められたるに、可厭といふでは無けれど何となく勇まぬ心地のするか、常とは違ひて沈めるやうなり。お龍が叔母は、全く我が思ふ如くになりたりと云ふにはあらねど、兎に角お龍を我が嫌ふお關が許より移し奪ひて、豫てお龍より聞きしに違はず富みて美しく智慧深き此家の主人が許に預かり貫ふ事となりたるに、心安堵き

莞爾つき勝なれば、根は善き人の徴とて顔に曇りなく、例の小なる三角の眼さへ、其の眼尻に寄る小皺に却つて可愛らしく貝

ゆ。たゞお形のみは心の動くこと無くてや、能く笑ひ能く語れども悦べるともなく樂まぬとも無く平然として、今猶前刻の如く澄まし返つたり。

お龍は何をか思へる、沈黙りて頭を垂れつ、**二**に譯も無く自己が衣服の袖膝などに吸ひ出されたる綿を摘みては除り摘みては除りながら、人の話をのみ聞きて居れば、叔母はお龍が様子などには眼も遣らずして、

「どうも誠に種々有り難うございます、お蔭様で私も安心いたしました。では私は直接にはお關に會ひませず、此儘で國歸りまして、憚りさまでございますがお關の方の事は、一切止方様次鎗に願ひます。若又全然握り拳でも濟みよせぬやうの事でございますましたならば、悪い奴に關りあつたのが不祥でございますから、三四十の金を出し惜みは致しません、御話さへございませれば直にも差出します何る彼も此女の爲宜かれと思ふからの事でございますすら忍耐も致します。全く彼様な奴**二**廿錢一つ呉れて遣ります因縁は無いと思ひますけれど些、些少ばかりの事で煩い關係を残すのも可厭ですし、此女と彼の婆と往來ぶ逢ひました時、此女に氣の怯けるやうな思ひをさせるのも可厭でございますから、其の位の事なら出しも致しましやうと思つて居りますのです。其**二**は御含み下さいますして、何様づも宜しいやうに御計らひを願ひます。此女の上は改めて今日私から御縫り申して御願申します。至つて我儘な無分別**二**てはございまするが、心から底から悪い奴といふのでも無いやうでございますから、何様か十分に御博酌なく御便ひなすつて、そして其中相應なものでもございました時に、御鑑識で夫で**二**持たせて遣つて下されば其上はございません。私は斯様ながさつ者でございましたも、姪一人叔母一人でございますから此を棄てる氣はございません。何處までも好くして遣りたいのは山々でございますが、とても私には制道の付きかねる氣**二**ぐれ者めでございますので、此方様へ願ふよりはかには願はうところも無いやうな譯でございますゆゑ、御迷惑でもございませやうが何様か御世話をなすつて下さいますやうに、汚い婆でございませるでも人様の御恩を忘れるやうな獸畜でもございま

せん田舎者が、折入つて此の通りにお願ひ申します。

と、云ひさま頭を下げて染々と眞心せめて頼み聞えつ

『歸りましたら早速衣類も送りまじやうし、又、當人の小遣な
んぞは御厄介にならないやうに致しまじやう。萬々一當人が不
都合な事でも仕出しましたらば、決して御迷惑は掛けませぬや
フに、屹度私が引請まするから、何卒御奉公人同様に御扱ひ
なすつて、末々を宜しく御願ひ申します。ほんとに少い時か
ら御馴染申したのが當人の幸福とは申しながら、是といふ譯も
無いのに斯様な我儘者を御願ひ申しまして、そして快よく御引
受けくださつて頂くといふのも、思へば餘り有り難過ぎまして、
何だか不思議なやうな氣が致します位でございます。』

と眞顔になつて恩を謝するを、お形は婿然と打笑つて

「なあに、其様なに恩に被て下さる事は有りやあ仕ません、人
は各自の氣性で種々な事を爲るのですもの。好いた盆栽の世
話を仕たからつて、盆栽に御禮を云はれやうつて思ふ人は一人
も有りやあ仕ません、ただ其の樹が好くさへなりやあ其が嬉し
いので。不思議な事も何も有りやあ仕ません、妾あ一體お龍
ちやんが好きなんですもの。ただお龍ちやんが好くさへなつ
てお呉れならそれで本望なので、何様なにか嬉しく思ふか知れ
や仕ません。」

と軽く答ふれば、何不足無き人の氣の持ち方はまた違ふもの
世には此の様な人も有ることか、と田舎者の我が心の狭く堅く
ろしきに比べてつくづく感じ入る時

『あの、お富の親父でございますつて、妙な老夫さんが御臺所
口へまゐりましたが、お杉さんも知つて居る人のやうに見えま
す、何様致しまじやう。』

と、其の來れる客の如何なる人なるかを小き胸に危むが如ふ眼
色して、年若く可憐らしきお春は取次ぎたり。

『い、よ。彼方へ行つて會ふのも面伊だから、此室へ連れてお
いでい。』

『お富の親つて、彼の妾の好きなお富さんの。』

『ア、彼女の。』

『彼女は退つたの。』

『い、え、然様定まつた譯ちやあ無いが、大方それで来たのだらう。』

お龍とお形との間に問と答へとの交はさるゝ間も無く、お春ニ迫かれて屈みながら此方へ來れる男は、お形の面をば見るや見ざるや、室の内へは入りも得せず恐れくゝて鳴居の外に坐りつ、先づ其の瘤せ枯びていと薄く長う見ゆる掌を疊に並べ貼けて頭を其の上に摺りつけ町ニ嚙に挨拶したるが、電燈の鮮やかなそ光りは、光澤無き細き毛の烟のやうにほやくと薄く残れる頭ニを照らして、悲しき老のさまを見はし、左のみ見苦しき襦袢を纏へりとはあらねども、肩窄りて何處と無く寒げなる様子は、見るものをして此の人貧に窶れて苦めるにはあらずやとニはしめたり。

其三十一

『好くお入來だつた、さあ遠慮仕無いで此方へ御入り。』
と、お形に優しく言葉を掛けられて、老人は漸くに頭をこそ擡げたれ、

『ハイ、ハイ。』
とばかりにて猶中々に席を進まず。

『お富は何様仕またえ。』
と、親しげに復問はれて、

『ハイ、ハイ。イエ、どうも不都合な奴でございまして、何共
ハヤ、どうも申上げやうもございませんで。』

と、ニけ上りたる額、細き鼻、たださへ貧相の面に虚偽ならぬ當惑の色を見し、甚く恐縮して同じ様の事のみを云へるは、傍眼のお龍にさへもどかしく聞えたり。

身に光澤も無く氣に張りも無くて、ただ老猫の寝ぼれたるやうの、此の老人の様子を、お形は心底より可笑がりてか、唇の湯にちらりと笑をば上せしが、忽地にして自ら抑へて、

『そんなに謝罪つてばかりおいでぢやあ話が出来ませんよ。何様しただえお富は。』

と、極めて平穩に問へば、老人は辛くも力を得たりと覺しく
「ハイ。イエ、どうも飛んでも無い大變な過失を彼女が致しまして、』

と云ひかけて復叮嚀に頭を下げたり。

矢ふべき事にはあらねど何と無く其の眞面目過ぎ萎縮過ぎた様の、氣の毒らしきを越して稍可笑きに、お龍は思はず眼のるに笑ひたり。

『そんなに謝罪つてばかり居ないでも宜うござんすといふのに。』

「ハイ、イエ、然様仰あつて下さいますと、愈恐れ入りますので。廻りくどうございませうが御詫を申し上げます、何卒知聞き下さいますやうに。もうこれお詫にも出そびれて十日ばかりになりましたが。然様、エ、ト、コート、丁度今日で十一日になります。彼女が貴女、眞青な顔をして駈け込んでまゐりまして、御主人様の御大切な御菓子鉢を仕舞はうとする時、つい取り落して割つて仕舞つたと申すのでございます。」

『ハア、大方其故で駈け出して行つて仕舞つたのだらうと妾も思つて居たが、今に何とか云つておいでだらうと思つて人もあげなかつたの。然様です、古渡りの繪南京の、一寸無い鉢を破つて仕舞つたので。』

『ハ、ハイ、ハイ。どうも飛んでも無い殖忽を致しました事で。其品は利齋とか仰ある方が納めました品でございまして、其折色々とその仁が其の御器の結構な事を御話しなさいました其談をちらく彼女が承はつて居つたさうで、何も分りません彼女でも大ニ結構な費い御品だといふ事だけはイじて居りました砲、これは御詫の仕やうも無い事を仕たと、ト胸を衝いたと申すのでございまして。何様も何ともハヤ和濟みません事で。ハイ、ハイ。それら私が費女、代りの品を差出しまして御勘辨を願はうと存じまして、彼女と二人で東京中を捜しましたが、中々どう致しまして似たやうな品もございません。』

『まあ詰らないそんな餘計な苦勞を仕て貰はうとも何とも此方ぢやあ思つて居も仕ないものを。』

『ハイ、ハイ。まことに何様も恐れ入りましたことで。然様ニあつて下さいまして、夫では濟みません譯で。貴女、彼女が此方様へまゐります前に御奉公致して居りました御邸は伯爵様とかでいらつしやいましたが、彼方様では都べて女中の毀しましたものは皆其の毀したものが償ひまする御定規でございまし

て、彼女などは頂戴するものが少うございますから、始終持出しになりますやうな事でございました位で。』

『へーエー。』

「でございますから貴女、私は一生懸命に捜しまして、終には利齋といふ人まで尋ねまして仔細を話しまして、これ／＼の鉢が欲しいと申しましたところ、今欲しいと云つても今有るものでも無いし、有つたに致しても如是の價のものだと承はりました、私連の力には及びかねます大變なものでございましたのでいよく吃驚致しまして、とてもものめ／＼と御詫に出られた段ではございませんが、死ぬやうな氣になつて漸つと今日御詫に出ましたで。』

こゝまで云ひさして埋むるが如く疊に頭を擦りつけたる時、蒲き髪の下に透きて見えたる頭顱の地には、如何ばかり弱き心の苦しくや感じけん、慚かしさと切無さに絞り出されたる熱き汗の點々と玉をなして、蒸氣さへいさゝか立つごとく見えたり。

其三十一

『何様も何と申上ましても相濟みません無調法で。ハイ。口ばかりで何を申し上げましても、實以て相濟みません譯で、ハイお差しいことを申し上げませんが理が聞えませぬが、實は段々と不幸は續きますし、私は病身で商法は止めて居りますし、少しばかりの地所家作で細々と遣つて居ります中を、不孝者にの伴に大無しにされまして、まことにはや何様も斯様もならいやうになつて居りまするので、ただもう明暮、伴めの碌で無しの料簡の直りますやうにと、信心を致すのを今日の勤に致して居るやうな意氣地の無い次■でございますから、何共恐れ入よまする身勝手な申分ではございますが、今が今何様にか致さうと致しますれば、私一人のところへ夫婦掛向ひの人を置きました、その貸間の料で食べて居りまする住家をでも、何様か致して築段致すより他はございませんので、それでは何様も後々のところが……■

貧相な顔をいよく貧相に仕て困難の趣きを述べ哀愍を乞はんとする、其の言語は人の同情を惹くに足るほどの氣合さへ乏しけれど、其のくどくどしく悪町■なるに思直さは盡く知られた

お形は最早聞き居るに堪へかねてや、言葉の澱みに付け入りて又靜に又爽快に、

『まあ其は大■に心配をお爲だつたねえ。お前さんは當世にあ珍らしい律義な氣性なことなゝに彼様な鉢の一つや半分

危忽で毀したものを何で妾が償へなんぞといふものですかネ。』と云ひ出せば、老人は何と聞き取つてか慌て、遮りて

「ど、何様致しまして貴女、伯爵様の御邸でさへ、』

と、身に入みて記えたる事にて有るなくべし、伯爵邸の定掛を例に引きかくるを、二の句を續がせず、お形は冷やかに笑へたり。

「まあ御聞きなさいよ。伯爵様の御邸は伯爵様の御邸で、妾の家は妾の家ですよ。い、身分の方の眞似を妾等が仕ちやあ成りませんからネ。金屬でゞも有りやあ仕まいし、根が磁器ですのに、破れることも有りまじやう、其の磁器が危忽で破れたのを何様まあ酷く咎め立を仕まじやう。」

『ハ、ハイ、ハイ、ハイ。』
激しく感じたるならん、氣息の詰まるやうに老人は急き込みて挨拶したり。

「それも平常の勤め方でも悪いといふのなら叱言を云ふまいものでも有りませんが、何も彼も悉皆好く爲て呉れて居る彼のお富の爲た過失ですもの。」

『ハ、ハ、ハイ、ハイ。』

『少し位の品を毀したからつて何を云ひまじやう。使つてる中に器物が毀れるのは當然の事で、其を厭やあ箱の中へでも藏つて置くより他有りやあ仕無いと思ひますよ。器物をいたはつて人をいたはらないやうな事は妾あ大嫌ひで、あんな磁物を十個集せたつて百集せたつてお富が出来るのぢやあ無いんですもの、幾千お富の方を大切に思つてるか知れや仕ません。』

『ハ、ハ、ハイ、ハイ。』

『だから過失は過失で、一言詫を云はれりやあそれまでゞ濟まして仕舞ふがネ、それよりやあお富が大變に濟まない事がありますよ。』

『ハハツ、ハイ、ハイ、ハイ、ハイ。』

「其あ黙つて駈け出して仕舞つて妾に不自由をさせたことです。何も彼も彼女にさせて居るのに、急に出て行かれちやあ何様なに不自由に思ふか知れません。丁度好い代りが有りは有つたやうなもの、眞底詫びる氣があるなら、歸つて來てちやんと勤めつづく方が何程好いか知れやしません。」

「ハ、ツ、ハイ、ハイ。で、では僥忽を致しましたのは御免下さいまして、そ、そして今迄通り御使ひ下さいまするので。」

『使つて遣りますとも、使つて遣りますとも「あんな忠義も

の、氣立の好い兒が、磁器の三つや四つ破したつて何の何とに思ふもんで。」

『ハアーツ、有り難うございます、有り難うございます。早速彼女に唯今の有り難い御思召を申聞かせませんでは。』

老人は嬉しさに泣かぬばかりの顔して、許しをさへ得ば立たんとして追立尻になつたり。

『お富に話すつて、近處へでも連れて來て居るの、』

「ハイ、イエ。一緒に連れてはまゐりましたが、御裏口の戸外に立たせて置きましたので』

『ホ、ホ、、愍然に。何だつて戸外になんか立たせて置くのだらう、早く此方へ連れておいでなさい。』

其三十三

『妾は東京にやあ今時彼様いふ人は無からうとぼつかり思つて居ましたか、たまには矢張り彼様な正直な篤實の人もございませぬのネエ。』

お龍の叔母の如是云ひ出づるを主人に答へさする迄も無く、お龍は代つて、

『そりやあ叔母さん東京だつて狡二い人ばかりぢやあ有りません、廣いんですもの。今の話の伯爵のやうな卑格な人も有る代りにやあ、姉さんのやうな氣の大きい人もあるぢやあ有りませんか。』

と云へば、

『ほんにね。だが、其様な高い磁器なんか有るものか知ら二』

といふ。

『なあに、高いと云つたところで多寡の知れたものですが、つまり氣の小さい人やあ何様なものでも大したものに思へるのでねえ、それで大變に心配したでしやう。』

とお形の打笑ふ此の間答の中に老人は復入り來りしが、背後には恐れ惶みて小くなりたる若き女を連れたりお龍の叔母は何氣無く打見やるに、面貌は老人を其儘に眼も細く鼻も細けれ
■ 眺きかたにはあらず、卵子形の顔の上品に優しくて、慾には色のや、青白く束髮の毛の織過ぎて嵩少きを治して遣りたけれど、年齢には似氣無く靜に沈着いたる様如何にも恰恠らしく、お龍には慥に三歳四歳劣りなるべけれど、見比ぶればお龍の方若く浮々として、
■ に生死の苦勞を知れるにも似ず猶あど無く見ゆ今の談のお富とは是なるべし、成程平常は過失など中々仕出すまじき慎み深げの、氣の能く廻りさうな、くすみたる女かな。これで若し此程に縞の粗き銘撰を着居らずば、能く見ぬものは二十歳とも見做すべしと一度は思ひしが、流星に年齢は年論なり、主人と眼を見合すや否や、いと幼き素振りの繕ひ氣も無く頭を疊に着けて、

『飛んでも無いぢ忽を致しましたのを、御免下さいまして眞に有り難うございます。それから御斷りも致しませんで宅へまゐりましたのは猶相濟みませんでした

と素直に謝罪れば、お形は莞爾やかに、

『平常のお前の仕方が好いから叱らうとも何とも思つてやしません。過失は過失だから仕方が無い。これからさへ氣を付けてお呉れなら其で可よ。さあもうをかきな顔を仕ないでお前の馴染のお龍ちゃんにも挨拶をお爲。

といふ。叱りだにされず免されたる嬉しさに、さしぐむ
■ の目をあげて、さてそつとお龍を見て懐しげに叩頭すれば、お龍にまた懐かしげに其方を見やりて、

『お前さんが此方に見えなかつたので、妾あ何様なにか眞斷ず淋しく思つたらう。丁度好い事ねえ、かうして歸つておいづだつたのだから、またこれからお前さんと仲を好くして、先のやうに又毎朝起して貰ひましやうかネエ。ホ、て。と境無きことを早語り掛く。』

『また其様な下らない好い氣ぜんの事をお前はお云ひだよ。』

古々しげに叔母はたしなむるをお形は餘所に聽きて、茶をや往んとする、お春くと呼ぶに、お春は如何にしけん更に出で來らず。かゝる事を甚く悦ばぬお形の、聲こそは仿無く高めね

『お春、お春、』

と復呼べども更に答へなし。

『お春。何様したえお春。』

一ト聲は一ト聲に癩の募るさま歴々と見ゆるに、

『何でございますか、妾が』

とお富の立ちにかゝる時、臺所とおぼしきところにて、

「お春さん、お春さん、御召しなさるやうぢや無いかえ。おや、

お前さん、何を泣いて居るの。」

とお杉が平素馬士聲とて叱らるゝいと大きな丈夫さうな其の

馬士聲の聞えぬ

其三十四

「鶉といふ鳥は自分の身から出る香氣を止めて仕舞つて、獵犬に嗅ぎ出されないやうにする機能を有つて居ると銃獵者に聞いたが、お形、汝は一體が嫌に治めきつて居やがつて、そして時碧のやうな藝をする奴だなあ。』

とは嘗て筑波が二酔の後に罵りし語なるが、吉に遇ひても齒觀を露はして笑みくつがへる程は悦ばず、凶に遇ひても眉を皺めて沈み入る程は悲まで、何時も自分の顔つきの不齊の無いやうにと心がけて居るでも有るまじけれど、自然と胸の中のさまを鮮やかに他人に讀めるやうには面に出さぬお形も、烟草には柵草の蟲の有る道理にてや、矢張り或機には心の悶をば盡く面に現はすなり。

何時の事なりけん、一劇場に西洋婦人の奇術の興行の有りし時、

『姉さん、大變に面白いといふ噂ですから連れて行つて見せて。』

とお形に請求りけるに、

『觀たけりやあ汝一人で行つて御覽な。魔術は妾あ大嫌ひだよ。』

と膠も無く云はれしより不圖お龍は心付いて、差當り我が智護にて何共解らぬ事にあへば、お形は甚く面白からず思ふと見え、必らず可厭な可厭な顔して不快さを示すを知りぬ

何事の悲しくてお春は泣けるぞや、誰も其の故を思ひ得しものは無けれど、誰もまた其の故の分らねばとて何と思ふも無きに、お形は例の我が合點の行かぬといふことをば強く忌々しがつて其の故を解かんと、苦み悶ゆるなるべし、たゞ轉瞬するほどの刹那の間なれど、星のやうなる兩眼をや、寄せて上眼づかひしたる其の様子、何とも云へぬ可厭なところありて、牙彫の小町のやうな中分無き眼鼻立の美しさをも人をして忘れ果しめたり。かねて心づき居たればこそ、お龍ただ一人はお形が其の不快げなる面を爲したるを早くも見たれ、他の人々は更に氣の付かぬ間に、其人は復忽ち舊の様子になりたり。

お形はお春に復び管はず、お富に命令くればお富は心得て、人に茶を侷め菓子を薦めなどしけるが、其中良久しくお杉お春は何をか語りける、やがてお杉は次の間に來りて打笑ひながら、

『お春さんの泣いて居りましたのは斯様なのでございますよほんとに可憐らしいぢやあございませんか、あの斯様なのでございます。お富さんていふ方が歸つておいでになれば妾はお暇になるでしやう。折角こんな好い御家へ來合せたのに、また吾家へ行くのかと思ふと餘り情無いので、今伺つて居れば結構なお道具をお富さんていふ方が麁忽なすつても、器物よりやあ人か可愛いと仰あつて御叱言も無くつて濟みましたが、其のお優しい御話を伺つて居る中に妾あ胸が痛くなつて參りました。つい先月の末、詰らない茶飲茶碗一つ妾が麁忽して破りました時は、そりやあ繼母の事ですから仕方無いのですけれども、妾の一時間も二時間も口ぎたなく叱られました上、終にやあ性の付くやうにつて火の點いて居る煙管の雁首をしつと手の甲に捺し付けられました。今の御話を伺つて居る中に其の事を思ひ出しましたら、妾あ猫になつても宜うございますし、御膳を頂かなくつても宜うございますから、何様か此方の御家の何處かの隅へ置いて頂きたい氣が仕て……何様せ何も知ませんので御役には立ちませんし、無益ですから、置いては下さいますまいつ

二、それでつい、泣いて仕舞つたといふのでございます。ほんとに聞いて見ますりやあ繼母だもんですので愍然でございます

か、猫にでもなりたいたいなんかつて、ホ、ホ、何ぼ何でも可笑。ございます。併しそれに付けてもよくくだと思はれます。と告げたり。

聞けば何でも無き事なるにお形は晴やかなる面して、『ホ、何かと思つたら其様な事なのかえ。愍然さうに、其様なに居たがるものなら置いて遣りまじやう。恰恠で、そして毅然としたところがある中々の好兒だから。』

と云へば、其の語を聞きて物蔭に居たりしお春は如何ばかり據しくや思ひけん、誰が面前に居るとも無きところにて唯主人の方に對ひ、墨に手をニき頭を下げて恩を謝したり

先刻より始終を見聞きせるも、お富は云ふに及ばず、お富の父、お龍、お龍の叔母、お春、お杉の末に至るまで、誰か今寛大にして情ある此の家の美しき女主人に心を寄せざるもの有らん。あはれお形は一つの器を失つて六人の心を得たるなり。

お形も流石に心樂しきなるべし、鶉のやうなる藝をすると云はれし人ながら、例の治め切つたる顔つきの口の邊に、見ゆるか見えぬほどの誇りの笑を含みたり。

其三十五

お形が分別に長けたる事は對談の中にも知りしが、今又眼のあたりに其の胸の廣く慈悲の厚きをば見て、随分負けぬ氣のお龍の叔母も全く我を折り盡くして、好いと思ひ込めば何處までも好いに仕て終ふ田舎氣の正直三昧に、此の人にさへ頼み置け何様轉んでも間違無しと盡く信じて、何分宜しく願ひまするを百遍ほども云ひたる末、何事もお形任せにして其次の日に静岡へ歸りぬ。

『お龍ちゃん、お前一寸今までの居處へ歸つてネ、叔母のいひつけで今後これくのところ居るやうになつたといふ事だけを斷つておいでな。』

叔母の歸郷を停車場まで送つての後、何を思ふにや茫然として爲す事も無く居たるお龍に向つてお形はかくの如く云ひ出した。お龍は迷惑さうに眉根を寄せながら、何の思案も無く、

『行かなくつちやあいけませんかね、ネエ行かなくつちやあ。』と、然もく其の事の宥免を乞ふが如くに云へり。

『ホ、嫌なの其様に。怖いやうにでも思つてり。』
『怖いって事は有りませんが、今日つから御暇を致します、左様ならつて云ふのが何だか云ひづらいやうな心持がするんですもの。』

「だつて何もお前が不義理なことを爲るつて云ふのぢやあ無し、お前にも分つて居るとはり先方のお腹の中が良くないんだから、ことわりを云ふだけの事に譯は無いぢやあ無いか。」

「そりやあ、理屈は、もうほんとに其通りなんですけれども。」
「ぢやあ、また、何故ネエ。」

一何だか妾にも理由は分りませんが、妾にやあ判然と斷りが云へさうも無いんですもの。心はほんとに可厭な人ですはれども、表面だけにしろお龍くつて可愛がつて呉れまして、斯様やつて衣類も着せて呉れますし、一個あるものも半分は取り分けて呉れるやうに始終爲れて居るんですから、いつそ悪口でも云はれて喧嘩でも仕たら妾の胸の中を有り體に云ひ出す事も出来るか知れませんが、**二**でも優しい顔を仕て呉れて居るのに對つちやあ、其様な譯の有る筈は毫末も無いんですが、何だか彼家を出やうつて云ふのが我儘過ぎる不人情のこのやうに思はれてならないんですもの。

『ホ、、餘りお前は性分が美**三**なものだから氣が弱いねエぢやあ思ひきつて特と胃頭から喧嘩を仕たら何様だえ。』

一あら、姉さんはまあ甚い事ねえ、喧嘩つていふものは自然に出来るものなのに、わざと噴嘩をするなんて、そんな事があるの。」

『ホ、ホ、、あ、、有るともサ。妾なんぞは仕馴れて居る位だよ。どうだえ、吃驚お仕かえ、人が悪いだらうネエ。』

『イ、エ、嚴談ぢやあ無いよ、一寸行つておいでな。一人で心細いならお富を付けてあげやうはネ。年は行かないけれども大のしつかり者だら、彼女にすつかり口上を教へて遣りましよう。お前が何にも云はなくつても可いやうに。』

「まさか妾だつてお富さんに口上を云つて貰はなくつてもですが、眞實に何様しても行かなくつちやあ不可のでしやうか。」

如何にも苦しげにお龍は再び尋ねれば、お形も憐みて一寸考しが、

『お待ちよ。それほどお前が困るつて云ふのなら、ア、可いよ仕方が無い、手紙で云ふことにお爲。さうしたら向から足を渾んで来るだらう、どうせ一度は膨れつ面を持つて来るに定つて居るのだから。』

と負けて答へぬ。談話は是に終つてお龍は手紙を認めはじめしか、三行書きては破り、五行書きては丸め、幾度と無く書き損じたる後やうやくと恐惶まで纏めて、先づ初に世話になりたる恩を謝し、次には田舎氣質の叔母の片意地なる指揮の負き難き由を云ひ、扱其後に、我が意よりの事ならねども其方を離れて此家に留まりあるやうになりたる趣きを記したりけり。

如何ばかり文の言葉は優しく書かれたりとも、吾が物と思ひ込みたる禽に他家の檐端で鳴かれては堪忍なり難く、お關は慾の算盤の置違ひとなりたるに手紙讀む眼の玉をニ々とパチくさせ居りしが、やがて手紙を揉み丸めて投礫の如く投げ捨て、

『彼女も彼女だが、お形つて奴が忌々しい。誰が指を嘲へて引込む。人を馬鹿に仕あがる。』

と男のやうな言葉遣ひして獨り罵りつ、紫色になつて怒り瞋○たり。

其三十六

『え、ぢれつたいネ、煙草一つ入れるのに何を其様に愚圖愚圖して居るのだえ。百足に足袋でも穿かせやしまいし、宜い加減に早速と仕てお呉れな。』

樞貪聲に罵りながら、腹立ち紛れの力を籠めてぎうと吾が帶を緊く締め、猶帶揚を締め、帶留を締むる時、小婢のお熊が馴れぬ手つきのたどくしく漸くにして煙草を詰めて差し出す煙草袋を引奪るやうに取つてばたくと拂き、

『仕やうが無いねえ、此様に外部に煙草をくつつけちやあ。まるで毛が生えたやうぢや無いか。フツフツフツ。』

と吹けば、煙草の粉は空に飛び飛んで、うつかりと仰向いて、ニりに怒り立つ主人の面を訝り呆れながら視居たりしお熊が小さき金壺眼にむざんや舞ひ入りたり。

『アツ、ア、痛い。あんまりなこと。』

思はず叫びて眼を抑へ、泣きながらお熊の俯伏すを、愠み氣も無く見下して却つて冷笑ひ、

『下らなく汝がぼかんと仕て居るからだアネ。妾の知つた事ぢやあ無いよ。痛いつても火が入つた程ぢやあ有るまいから、其様な泣く事は無いやネ。さあ下駄を出しておくれ。え、うぢうぢして居るネ、分らない、跳足ぢやあ出られ無いぢや無いか。一々此様な事までも、ソレ／＼と云はれなくつちやあ分らないかえ、困つた人だネエ。チヨツ、いつまで半間な顔を仕て泣いて居るんだネ、鼠色の■なんか零して。火傷へ唐辛子味噌をつけられた狸に其様な顔を仕て居るのが有つたつけ。』

と、自己が煩悶の八ツあたりに口ぎたなく叱り嘲れば、悪口た浴せらるゝには既慣れたるお熊も膨れ返つて、色黒き小き身體をプリ／＼とさせつ、いと狭き額越しに恨みの眼を遣りて、言葉無くパイと立上り、疊に躓けるやうに歩いて出口の方に至りがたりびしりと物音荒く下駄箱に當り散らしたり。

『ぢやあ一寸往つて來るから氣をつけて居なくちやあ不可よオヤ、狸さん、怒つて膨れておいでだネ。怒つてりやあ睡くならないから其も宜いだらう。留守番が性も無く坐睡を仕て、魂魄が鼻の穴から獅子の洞入り洞還りなんかを仕て居られるよりやあ、其の方が優らしいから。ハ、ハ、ハ、ぢやあ頼むよ御留守番、好い御土産を買つて來やうネエ。』

纔に胸の中の鬱々を洩すか、盆も無い悪口に目下を𦉳つてお關は出で去れば、主を送り出して後に残りしお熊は、室の眞中に取り散らされたる主人の■つからしをば片付くるとて、其の手に衣紋竹を持ちたれども片手は更に使はで、足の先に幾度か衣類を蹴返し蹴返しつ、終に片手業に衣紋竹に引掛けて壁に掛けたりしが、たまく／＼催したる噴■を遠慮も無く大きくして、

『ハツクシヨーン。』

と特さらに我が顔を今掛けたる衣類の胴のあたりに持ち行きつ、した、かに汚き唾液の霧を注ぐが如く噴き掛けぬ

土瓶の底を抜き、桶の■をはじけさせるなど、下司の復讐は都て陰でする習ひなれば、それよりお熊の戸棚捜し仕て、白砂糖

を舐め、奈良漬を荒し、自己が嗜きなものは暴れ食して、蓋物の蓋を除つて自己が好かぬ鹽辛なんぞに遇へば唾液を仕込で二き廻し置くやうの事を仕居るとも知らず、お關は勢込んでお形が家を尋ねたり

便利なる場處の聊か引退んで靜なるところに、すべて金子のかりたる造りの、見るから知らるゝ其の贅澤さの小二らしき家を、此家と尋ね得てお關の訪問へば、折から此のむづかしい世を餘所にして、此所は日の短い盛りをも長く暮すやうなる長閑さを現す賑やかなる手物の撥音鮮やかに、二人して弾く絃の音の冴えて、然も面白げに樓上あるべく思はるゝ奥の方より洩れ聞え來つ、婢等も其方に耳や奪られ居る、御免なさい、御免なさい、と云へど應ふるものも無く、拭いて除つたやうに奇麗なる三和土の履二に良久しく立たされたり

其三十七

何知らぬ耳にも面白きは面白く、連弾の三味線の音、急なる時には玉霰銀盤を拍ち、緩き時には寒水せゝらぎに咽んで、一喜一低、一挑一撥、前撃は後聲を呼び、後聲は前聲に應へて、斷えつ續きつする間に、おのづと人の心を撮り去れば、彼は何といふ曲ぞとも知らぬお春さへ聞惚れて、身はこゝに在りながら起を彼方の樓上に馳せて、ただ恍然と我を忘れたる折しも、如るが如く罵るが如き案内乞ふ聲を聞きつけて、吃驚して我に復り、周章で、立出で見れば、衣服こそ見苦しくはあらね、五十近き女の、たださへ下品に肥りたる平顔を、目に見ゆるほど膨らませきつたる不機嫌の氣色怖ろしく、嫌味らしく細く剃りつけたるをかしき眉を擧げ、白請の赤濁りせる汚き眼の小きに稜立て、、『此の小びつちよめが』と云はぬばかりに頭から見下し。その言葉つきも二らしく刺々しく、

『お龍に然様云つて下さい、本銀町から來ましたと。ハイ、然様云つて下さればそれで分るのですから。居不在なんぞは使はせませんよ。それあの上調子を付けて居る。彼は屹度お龍に定つてるんですからネ。』

と無遠慮にも程度のあるに、不在を使はれやうかとの先潜り二でして、撥音を聞いて其の人を猜することの出来るものやら出

來ぬものやら知らねど、抜けさせぬつもりからの當推に、硝子箱の中のものを見でも仕たやうに確に其と指して云ひたきまを云ひたり。

其の輕貪き、其の無作法き、其の尊大さ、その下作きに、優しきお春は驚き呆れつ、一寸の蟲にも五分の魂魄あれば、胸の中には可厭なく人と■蔑みながら、

『お待ち下さいまし、然様申しますから。』

と冷やかに答へて徐々に身を起し、奥深なる樓上に至りたり見れば主人のお形は常の如く沈着きたる面の色、逼らず急かすただ白く、下品の人を今見たる目には宛も女雛などを見る如にく上品に見え、お龍はまた思はず知らず興に乗り心はずませて我おもしろく弾くと思しく、汗ばむといふほどにはあらねど氣勢込みたる面色や、紅色さして美しく見えしが、主人は我方を見も返らねどお龍は活々としたる眼にちらりと此方を見しに、ただ一心に弾きつづけたり。遠く聞きしにだに賑やかなりしを、近く聞けば又一ト■おもしろき絃の色音の、或は強く撥き或は軽く挑ひ或は弾く彼絃の餘韻未だ消えずして此絃の響新に起る音と音とは、一條の玉の鎖の環と環と相連り、一聯の化輪の花と花と相襲なりて、いづくに斷目も見えざるが如くなれば、言を出さん機會を知らずして、困りく／＼と躊躇しけるが、いつまでかくては濟まじとお龍の傍にや、近づきて、

『お龍さん、あの、本銀町からまゐりましたつて何だか可厭な人でございますが、五十ばかりのお方が……』

と云へばお龍はそれと聞いて、弾く手は止めざれども眼はお形の方を見て、許可をさへ得ば直にも立つて下に行かん素振をあらはしたり。お形はこれを見てお龍には答へず、居るか居ぬか知れざるやうに先刻より我が後の隅にかしこまりて控へ居しお富を一寸見れば、お富は早くも其の意を悟りて、お春の袂を引き引きて樓下に去りぬ

『何、お富さん、無理に妾の袂を引ばつて。』

解し得ぬお春の訝り問ふをお富は冷笑つて、

『何ぢやありませんは、下らないよ、お前さんは。あ、やつて遊んで居らつしやる最中に下らない事なんぞ云つて行くのぢ』

もの。御邪魔になるぢやあ無いかネ、何でも自分の仕て居らハしやる事の腰を折られたりなんぞするのは大嫌ひの御方なんぢからネ。もう今お龍さんが立たうとなすつただけで餘程可厭ニ思て居らつしやるのだよ。何様して、そりやあ〜御行届きたとる方だけに恐ろしい高慢の強い御氣象なんだからネ。人がニたら待たして置いてお済みになつた時申し上げさへすりやあそれ、宜いぢやあ無いかえ。こんどから氣を付けないと、馬庶だといつて御笑ひになるよ。』

と自己も一度は笑はれたる事のあるなるべし、姉ぶつて教へわ「然様、だつて何だかぶり〜怒つて居る、やかましい事でも云ひさうな權幕の人が來たんですもの。」

と、負惜み氣味に辯解を、試みるを、

『何だえ、やかましいことでも云ひさうな人だつて。へエー。

ナニ、何様な人だつて關ふことがあるもんかネ、下らない!」

茨等あ御主人様の御氣に入るやうにさへ爲りやあ宜いぢやあ舞いか。ぢやあ妾が待つて居ろつて、待たせて置いて遣りましやう。』

と此は飽まで姉ぶつて入口の方に行きたり、樓上の紡撃は盛んに續けり。

其三十八

同じ身分ながらも新參だけに我が下につけるお春に對ひては

神經質の本性を露して偶然したる氣の向き方のはすみにかゝり

ニ地でも悪き人のやうに、つけ〜と思ふまゝ、を自己が心の銅るに任せて、年齢の十歳も違ふほど大人ぶりて鋭くも言へ、相が粗豪からぬ氣象の心細かければ、客に對ひては打つて變つて、顔色も恭しく言葉も慇懃に、

『さあ何様かまあ此方へ御上りなさいまして、』

と入口近き一ト室に通して、會ふとも會はぬとも其の挨拶は云はず、待てと特更には告げず黙つて待たせ置き、物の値でも定むやうに室の中をきよろ〜眼に見回す客を其儘残して身は蔭に退き、

「ほんたうにお春さん、何だか可厭な人ネエ。でも宜いは、お茶と火とだけ與つて置いて、黙つて引込んでさへ居りやあ、そ

れで済むのだもの。關ふことは有りやあ仕ませんは、柔軟にあしらつて、そして無言でさへ居りやあ。妾あ彼方で御用があるか知れないから……」

と云ひさして既樓の方へ去れば、お春は言葉の如く唯護みて火を運び茶を運べり。

お富が樓へ上りたる時は曲は既終りに近く、やがて二人は弾き仕舞ひけるが、お形は此の時はじめて莞爾としてお龍を見遣りつ、

「面白かつたこと久しぶり二人で弾いたので、だが妾にあ樂ぢやあ無かつたの、たまに弾いたんだから。」

と、何處に人が来て待つて居るかも知らぬやうに、悠然と云

「あら■ばつかり、妾こそ姉さんと弾くと氣が詰まるやうな氣が仕て樂ぢやあ無いの」。姉さんは餘り奇麗に、そして餘りれつかり／＼に几帳面にお弾きなさるんですもの」。

、お龍も是非無く受答へは仕て居れど、此は來客の心にかればにや言葉つきも聊か早く、お形は今しもお富が薦むる■の茶を然も心好げに飲み味はふにも似ず、此は茶碗を手に取り上ぐる事だに爲さざるなり。

『然様ネエ、どうも妾の弾き方は器械かなんかが動く様で、吐か無くつていけないよ。詰り習つて記えたつて云ふつ限りの抜で、ほんたうは藝事の出来るつて云ふ人の性質ぢやあ無いのだ不。お前はまた大變に出来不出来がお有りのやうだけれど、今日のをやうに機勢に乗つてお弾きのときは、ほんとに■らしい位見事に御出来だよ。詰りお前のは、何様かした時にやあ、おぼえたつて云ふつ限りの技ぢやあ無いものが何處からか知らないか出て来るんだネエ。生れついて■の味といふものを有つてふいでなんだよ。』

『なあに、然様ぢやあ無いんですけれどネ、一人でなんか弾くと、妾あつましらないと思つて弾く時が多いんですがネ、姉さんと弾いたりなんぞすると、何様かすると不思議に自分でも面白くなつて來ることがあるんですの、そして然様いふ時は屹度自分の思ふやうに自然に弾けるんですよ。やつぱり一生懸命になるからなんでしやうかネエ。』

「ホ、、、一生懸命になりやあ巧く弾けるけれども、然様でない時あ弾けないつて云ふんぢやあ、ぢやあお前は横着者見たやうだ事ネエ。』

「ホ、、、屹度然様なんか知れませんか。でも妾あ故と然様やるのぢやあ無くつて、自然に生れついて居る横着者なんでしやうから……』

『悪い横着者ぢやあ有るまいとお云ひの。』

「ホ、ホ、ホ、』

『ホ、ホホ、、、マア蟲が宜いネエ。』

「ホ、ホ、、、美しい横着者でも悪い横着者でも其りやあ關ひませんが、樓下の彼の人待つて居ましやうから……

斯く云ひて立たんとするお龍を抑止めて

『宜いよ、お前はまあ此室においで。妾が會つて談を仕て仕舞ふから。』

とお形はやをら身を起したり。

其三十九

こゝに居よと云はれては逆らふべくもあらねば、お龍は残り止まりて三味線の絃を＝し緩めなど仕ながらも、我が上に就きて來れる彼のお關が事の氣になりてならねば、そこら取片付くスお富をば一寸視て、

「お春さんの云つたやうに、ほんに怒つて居て。」

と問へば、お富はさもく其の人を厭ひ嫌ふといふやうに、すらでも淋しき顔を妙に皺めて、

『ほんとに恐ろしくぶりくして居ますの。まるで御酒にブも酔つた人のやうな顔を仕まして、』
と先づ答へつ、

『何だか自分勝手の無理屈でも云ひさうな可厭な人ですこと＝エ。』

と添へたり。

『マア可厭なことネエ。そんなやうに見えるほど恐ろしい怒つた顔を仕て居て。』

『然様なんですよ、怒り切つて居るといふ顔つきなんです。これに一體が地腫の仕たやうな顔なんでしやうかネエ、随分おそ

ろしく膨れかへつて、宛然：

『宛然何なの。自分でばかり承知して笑つて。』

『マア止して置きましょうやう他人様の悪口なんか。』

『ホ、をかしな人ネエ、一人で合點して一人で可笑がつたりなんかして。』

『ホ、、、でも悪うございますもの。』

宛然河豚が五合も引掛けたやうと云はんと仕たりし歟、風船球に眼鼻を付けたやうと云はんと仕たりし歟、終に口を啓かねば知るものは當人の胸のみ。

『マア勘忍して置いて頂戴よ。』

と軽く謝びて根問さるゝを遮り止めつ樓下に去りたり。

人去つて小樓靜に、剝抜の桐の手爐の小なるを擁して、雪と白き蠣灰に織き火^ニもて譯も無く假名文字を書きては消し書きては消しつ、お龍はじつと心一筋に彼方の談話の何となり行くかを想ひやりつ、

『彼の勝手の強い慾の深いお師匠さんがまあ何様な事をお云ひのだらう。そりやあもう智慧も分別も確固としておいで、而して言語だつて拙い事なんぞはお云ひで無い姉さんの事だから、何を對手で云つたつて譯も無く捌いてお仕舞ひなさるには違ひ無からうが、對手が無茶な人なだけに御困りなさりは仕まいか知らん。自分の勝手づくに掛けちやあ理合や情合に構つて居る様な其様な上品な人ぢやあ無さ、うな彼の人を對手にして、くだらない悪口や無理な難題でも云はれて困つておいで、は有るまいか知ら。對手が無茶な人でさへ無ければ宜いだけでも、男にでも何でも負けては居ない様な氣の強い人ではあるし、また大變に怒り立つて來たのだとはいふし、一體が勝手のひどい甚い人だら、いくら姉様が冷慥でも扱ひ難いかと思はれるが、まあどんな事を云つて來たもので有らう。若し下らない事を云つて暇鳴り立てでもされた日には、ほんとに姉さんにお氣の毒で、妾はまあ何様したら宜からう。何様か彼の人が姉さんの理解に折れて呉れ、ば宜いが、いくら姉さんでも對手が悪いから、何だか覺束無いやうな氣が仕てならない。あ、氣の揉める。體まあ今日の談は何様結局がついて、そして妾はまあこれから

前途何様なつて行く身なのだらう。
と取り止まらず物を案じて耳は彼方にのみ走れど、距離隔てわれれば音も聞えず、人もあらぬが如く此家静なり。

や、久くして階段を上り来る人の跫音し、やがてお春は襖を開きて面を出せば、

『妾に來いつて、』

とお龍は此方より問ひかけたり。

『ハイ、左様仰あいましたので。』

今さら胸のたくつくやうおぼえて、話の模様を測りかねつ、お龍は却つて頓には起たざりけり。

其四十

我が眼の力の及ばぬ闇の夜に歩の進まぬやうに、お龍は鬼胎を怒きながら室に入りて見れば、朝日の光りのあるところ自然よ心強きやうの感の仕て、先づお形が平常にも増して位を取つて沈着き切つたる面の上に、掛れる雲の影だに無き様なるに氣も勇み立ち、其の横手の方に、や、下りて坐りつ、いろ／＼の思に小波の文立つ胸を鎮めて、言葉は無けれど町呼に挨拶したりちらりと見しお關が顔色の、お春お富が言葉とは違ひて、思ひのほか平穩なるやうなるに、心ひそかに疑ひながら徐に頭を擡ぐれば、これはまた如何なることぞやお關は滿面に春を湛へて、さも／＼親しげに又懐かしげに、

一マア立派におなりなこと、吃驚して仕舞つたよ。少し粹だけれども全然如是ぢやあ立派な御邸のお嬢様だよ。好いことみ

一、お龍ちゃんは大變な幸福を御仕ねエ。ほんとにマア／＼違へて仕舞ふよ。平常でさへ斯様ぢやあ外へでもお出の時は

ア何様なに、見事にお仕だらう。ほんとにお前さんはマア大變な幸福な身におなりネエ。妾の處なんぞに御在でござらん、

程妾がやきもき思つて好遇してあげたからつて、精々外出衣が銘仙か節糸位の物で、それより上あ妾が千圓の二にでも中つ

り知らないこと、まあ／＼お前さんに御召縮緬なんか引張らばてあげることあ出來つこは有りやあ仕ないのに、お正月でも鉦けりやあお節句でも無い日に、然様いふ衣服を仕てお在のやにおなりたあ、眞實にマアお前さんは大變な幸福ネエ。それ。

これも悉皆此方様のお庇蔭で、私等の働きやお前さんの力なくぞからぢやあ、皺鉢立を仕たつて出来るこつちやありませんよ。だから眞實に仇や疎略に思つちやあ濟みませんよ、何で此方様の仰あり次第に身を粉にしても働か無くつちやあ濟みませんよ。若しお前さんの仕方にそで無いことでも有らうもんなら、此方様ぢやあ容教つてお置きなすつても私が承知しや仕無い心算で居るからネ。屹度妾が出て来てお前さんを折檻すると御思ひよ。ハ、ホ、ハ、オヤマア此あ下らないことを云つたものだネエ、お誰ちやんが如在でも有る人のやうに。ハ、ハ、だが、ただ此あ其程までに私あ此方様をお前さんに取つちやあ有りがたいと思つてるといふ心持を打撒けたばかりなんさ。ほんとに戯談ちやあ有りませんよ、身に染みて有り難いと思はなくつちやあ罰が當りますよ。妾もネエ、お前さんから縁を牽いたお蔭でもつてネエ、此方様のやうな結構な方にもお目にかかつたり、それから又種々優しく仰あつて戴いたりなんかして、此様な嬉しいことは有りませんのですよ。何様かネエお前さ々からも能く御禮を申してネ、そしてネ、今後も時々は御邪魔アも御出入をさせて戴くやうにネ、何様かお前さんからも能く頗つて下さいよ。そして妾あ又お前さんに一つ御願があるのだがネ。ナア二面倒な事でも何でも無いんで、ただ今度他へ出る時一寸回り道を仕てネ、汚くつても妾の宅へ寄つて御茶の一つ■飲んで行つて貰ひたいのさ。ただもう、お前さんが如是に立派におなりだといふことを誰か知らに見せて、私が腹一杯に天狗を云つて威張たいんだから。ア、それから又、此様なに何不足ない結構なところへ御いでのためから、何も彼も要ることは御有りぢや無からうがネエ、私のところにお前さんのこぎくした物や何かがそつくり仕て居る、彼品は悉皆明日にでも持たして遺しますからネ。」

と、追従やら誤辭やらを混滞に、叮呼と粗略との虎斑の言葉浩ひに、何かは知らず無上に機嫌好く饒舌り立てられ、お龍はおただだ煙に巻かれて、すべてが我が思のほかなりしに返辭にへ迷ひつ、如何に應對ひて如是は虎のやうなるべきお關をば甘へて戯る、猫のやうには仕たりしかと、不審さに堪へぬ眼を

張つてお形を見たり。

尾もあらば振つて見すべき程悦びかへつて、お關はおのが賤しき詞の端々に下卑たる心の隈々を残りなく露すをも顧みず、知ら知らしきまでお形お龍に誤辭の數々を云ひ盡したる後、あ二り長居して愛想をつかされてはと思ひてか、但しはお形が餘り多くも言はず餘り多くも笑はで、いつまでも面正しくなし居るに、流石の勝手者も氣の置いてか、呉々も此後とも疎み棄てられぬやうにと頼み聞えて、お富お春にまで無理二ねに拶ねつきたるやうの愛想の有る限りを振り撒き、來りし時の荒々しかりしには引かへ、歸る時には疊もそつと踏むやうにして漸くに出去れば、其背影の見えずなるや否や、送つて出でたるお春は堪へかねて、フ、ワ、と笑ひ出し、

二『マア、何ていふ現金な得手勝手な人でしょう。來た時にやあ宛然狂犬見た様に、手でも出したら二ひつきさうな怖しい額を仕て來て、歸る時にやあ小狗かなんかの様にころくして悦で行くんですもの。』お、可厭なをかしなお婆さんだこと。』と、引返しながらお富と顔を見合せて云ふを、これも何處やらに笑を含みながらも叱るが如く上眼つかひして制し止めつ、お富は小聲に、

『でも彼様いふのが正直つて云ふんで、可愛い性分なんですかも知れませんかよ。罪も何も無くつてネエ。』

と冷やかに罵る。お春は此語を聞いて猶笑ひ止まず

『左様ネエ、毫も奥底が無いんですからネエ。だが、左様いばお富さんなんぞは大變に可愛らしくない人なのり。何でも二慮深くつて、慎みが深いのですもの。』

と小聲に語り合ふ此方は此方、彼方は彼方にて、お龍は先づ訝り糺し、

『姉さん、彼の人を何様なすつたの。』

と問へば、お形は微しく笑を含み、

「何故ヲ。別に何様も仕やうは有りやあ仕無いぢや無いか。

と澄まし切つて云ふ

『でも大變に怒つて來たといふのに、妾が下りて來て見りやあ毫もそんな様子は無くつて、怒るところぢやあ無く、莞爾して

ばかり居るぢやありませんか。

『そりやあ何お前、何も不思議は有りやあ仕ないはネ。些少^二かり金銭を與つたので如是悦んで仕舞つたのさ。』

「金銭を。」

『あ、。』

『あら。何も姉さんがそんなものお與んなさる理由は無いぢやありませんか。さうして姉さんも彼の静岡のに、お金は惜かないけれども取られるのは業腹だから、と御自分でちやんと然様仰あつたぢやありませんか。』

「そりやお前の叔母さんには然様云つたけれどもネ、彼りやあ云はば叔母さんの氣の濟むやうに云つただけの事でネ、何も妾あ彼様な慾張りの人と争り合はうといふ氣は最初ら無か、つただよ。』

「でも理由も無い金銭を。』

「取られたつて口惜しかあ無いぢやあ無いか、物事さへすらりツとそれで濟んで仕舞へば。妾あ彼様な人を對手に仕て争り合ふなあ何程得がいつても可厭だよ。

『そりやあ然様でしやうけれども、餘りそれぢやあ……』

『だつて仕方が有りやあ仕ないやネ、蚊を拍けばお前掌が汚めやうぢやあ無いか、蚤を潰しやあ矢張爪が汚れるはネ。下らない人を相手に仕て居りやあ、始終下らないことを仕て居なけやあならないやうな譯になるもの。』

其四十一

氣位高しと云はば氣位高しと云ふべし、^二しと云はば^三しと^二ふべし、お形は眉をだに動かさで澄ましかへつて斯く云ひて、然も然も我が言に無理はあらじ、然は思はずやと云はぬばかりにお龍を徐に見けるが、お龍はや、頭を垂れて獨り物を思ひ居つ、自己はおのれだけに何事をか考へ居れり。

『お龍ちゃん、何を其様にお前は考へ込んで居るの^二。』

介快氣といふまでにはあらねど、言葉の優しきには似ず聊か悦ばぬ色してお形は尋ねたり。

「何つて、何も考へてやしませんけど、ただ餘り何様も……」

「餘り何様も……世話になり過ぎるとでも思つておいでの^二。

『唯。だつて何様も何だ彼だつて餘り御厄介ばかり掛けるんですもの。』

『ぢやあ其が可厭だとても御思ひなの。』

『あら飛んでもない、然様ぢや有りませんが、餘り重ね重ねですから、何だか姉さんに濟まないやうな氣が仕て仕方が無いもんですから、それで茫然と考へて居たんですよ。』

『宜いぢやあ無いかえ、そんな事を考へ無くつたつて。妾が好きで爲る事だから放擲つて任してお置きでも。何もお前に頼まれたから爲るつて云ふんぢやあ無いのだから、妾の道樂で勝手な事を仕て居るんだと思つておいでな。』

『でも何だか餘りなんですもの。彼様な人にまで妾の故でもつて……』

『宜いよ、そんな詰らないことを。氣にお仕で無いといふのに
二、お前は近頃は氣が小さくおなりだネエ。構はないぢやに無いか。そんな事ばかり云つて御いでんやうぢやあ、お前に
三あまだ妾の氣性も心持も能くは解らないのだネエ、いやな人がことネ』

『い、え、姉さんの心持だつて氣性だつて其あ知つてますはいくら妾が恰恠ぢや無くつても其あちやんと知つて居ますよ。然様、それぢやあ宜いぢやあ無いか、そんな事を氣に仕なノつても。妾あお龍ちやんの先から知つてる通りにネ、何にもれといふ慾も願も有りやあ仕無いけれども、ただ毎日々々を心持宜く、不快なことや馬鹿な事や汚穢い事にたづさはらないでそれで消光つて行きさへすりやあ、好いと思つてるのだから。

『そりやあもう姉さんばかりぢやあ有りませんは、妾だつて、誰だつて。』

『それ御覽な。そんなら彼様な人にかゝりあつて争りあつてなんぞ居るより、些細ばかりの阿賭物で奇麗事に埒を明けた方が何程理屈が好いか知れや仕無いやネ。下らない人を相手にする位下らないことは有りやあ仕無いもの。』

『そりやあもう然様には定つてますけれども、其の些少ばかりの物だつてただ湧いて來やあ仕ませんから。』

『ホ、、、そんな下らない見つとも無いことを二度と云つてお

呉れぢやあ可厭だよ。可惜お龍ちゃんの器量が下つて仕舞ふよ
今が今の心持さへ好けりやあ其で可いんだもの、何も格いもの
は無からうぢやあ無いか。妾あ妾の身體だつて格んで居や仕無
い身ぢやあ無いか。何でも可いから、妾あ妾の周圍にお前のや
うな妾の好きな人達を置いて妾の好きなところに居て妾の好きな
ことを仕て遊んで居りやあ其で可いのだよ。

其四十三

『そりやあもう姉さんは何をなさらうと随意におんななさる事
ですから、姉さんの氣性一ぱいに生活して行かうと御思なさる
そりやあ其で宜いんですが、妾あまた妾で、働きも意氣地もな
いもんですから……』

『それで?』

「……………」

『あ、解つたよ。恩を受けるなあ可いやうなもんだけれど
返しやうの目的が無いから困ると御おもひなんだらう。』

『困るといふんでもありませんけど、まあ然様なの。何も妨さ
んが人に恩返しを仕てもらはうなんて云つたやうな其様な氣を
有つておいでぢやあ無いのには知りきつてますが、何様したら妾
が嬉しいと身に染みて思つて居る此の心持を、何かに爲て妨さ
んに見ていただくことが出来るだらうと思つて、それが氣にな
てならないのです。妾あ如是なぶらんさんの身ぢやあ有りま
し、何一つ遂げて出来る拔が有るんぢや有りませんし、これ、
ら前途何年だけ經ちやあ何様なる身だつて云ふんでも無いの
すから、心にやあ斷えずに思つて居ても、何時になつたらまあ
空少ばかりでも御禮らしいことが出来ることだらう、と思つ
と何だか妙に味氣なくなつて、妾の行末が情無か果敢無い、

薄暗い路を薄寒い日に辿るやうな、何とも云へない心細いやら
に氣が仕て、とても自分の氣の濟むだけの事を仕て姉さんに見
ていただく事なんかは、一生だつても出来無いやうな可厭な感
がするんです。斯様いつたら御笑ひなさるでしやうが……ぢやあ
無いのです、今になつて叔母が云ひました言葉が妙に胸に浮ん
で來て、いつそ前途も見えも仕ないのにかくくと日を過すよ
り鋤や鍬を擔ぐ男でも實直な堅い人を、自分の一生の柱に頼ん

で眞黒になつて働いて、さうして適には姉さんのところへ大恭や竹の子を持つて来て、これは妾が作りました、これはわたしの背戸の藪で掘りましたつて云ふやうなことを云つて、ほんよにお龍がまあ田舎者になりきつて御仕舞で、何と好いお土産をお呉れぢやあ無いか、とお富さんやなんぞと御笑ひ合ひなすつて頂く様な其様な身になつて仕舞つたら、其の方が宜いか知らと思ふ氣さへ仕ますが、まさかに然様も思ひ切れないで……眞面目に云ふ言葉は、笑聲に打消されたり。

『ホ、ホ、ホ、可笑なお龍ちゃんだよ、ホ、ホ、ホ、何だネエ急に年をお取りだネ。詰らない。濕つぽい、そんなことを言ふものぢやあ無いや。大根や竹の子なんかあ妾あ可厭だよ、

＝

女は所天次第ぢやあ無いか、立派な所天を御持ちで、そして辛にやあ金剛石の首飾りでもなんでも澤山お呉れ。買物は勝＝
だあネ、男子は撰み取りにするが宜いぢやあ無いか、腕のある確固した男さへ持ちやあ、何も彼も湧いて來やうぢやあ無いかえ。そりやあお前の胸ん中に働きのある好漢が無いもんだから、そんな陰氣＝いことを云ふやうになるんだよ。いくら好い人でも手腕の無なあ、所天に仕やうとすりやあ淋しくつていけな
いよ。彼の人なんぞはまあ抛擲つて置いて、搜してごらん、何程も好い男はあるよ。お前に一人見せてあげやうかネエ。其男なら屹度お前の行末を春の日に好い海邊でも歩かせるやうに爲るに定つて居るよ。其に引代へて水野つていふ人ネ、彼の人ネ、彼の人と連れ立ちやあ、お前は成程薄暗い路を薄寒い日に辿スよ。』

其四十四

『いやですは姉さん、また其様な事を云つて。妾あ何も彼の人を何様の彼様のと其様な事なんか胸の中で思つてやしませんて云つたぢやあ有りませんか。』

『あ、然様だつてネエ。』

と云ひたる限り後は何とも云はで止みたれども、お形はお龍の言葉をば信するが如く疑ふが如く其の面を見やりて、心解けてにもあらず、さればと云ひて嘲みてにもあらず、ただにやりと

笑つたり。

氣の直なるお龍はお形の言葉を言葉通りに聞けるなるべし。

『そして其様な戯談なんか御云ひなすつたつて、其りやあ姉さんみたやうに何も彼も能く出来て、おまけに世の中のほんとの事が悉皆解つて居て、容貌も百人千人に勝れて美しいといふんなら、妾でも出来るか知れませんが、男子は擇み取りだなんて、マア其様なことは、生れ代つてでも來なけりやあ到底出來やしません。妾なんか圃の中の蠻南瓜や茄子だつて、ほんとに叔母の云つた通りの下らない稟賦なんですもの。出世しやうと思つたつて、運に乗らうと思つたつて、何が何様なりましやう。加之もうく／＼所天を持たうなんて、そんなことはふつ／＼厭に思つて居るんですから。持つ位なら虚言ぢやあ有りません蠻南瓜や茄子に相應な何首烏球に手足の生えた様なお百姓さんでも持ちましやうが、それも矢張可厭ですから、一生一人で居ます。氣の利いた男を持ちたいの、出世を仕て見度いのと、甘様な蟲の好いことを考へて居るほどに身の程を知らなかあ有りません。ですから前途の事を思ふと、心細くなつて仕舞ふんです。』

と云へば、

『オホ、、、何様か仕ておいでだよお龍ちゃんは。そんな老けた事ばかり云つて何様するつもりなんだらう。蟲の好いことを考へてるからこそ人間は生きて居られるんぢやあ無いかえ。お前見たやうに其様なことを云つてた日にやあ終局にやあ坊さ々にでもならなきやあ追付かないことになるはネ。いけないよいけないよ、そんな弱い氣ぢやあ。何も一生だけは、ネ、面白く生活すが可いぢやあ無いか。擇み取りに仕て取れ無くつたつて本なんだもの。』また擇み、また擇み仕て居りやあ、其の中にやあ氣に入つたので縁の有るのも出て來やうぢやあ無いか。』

『あら』

『ホ、、何様だえ、妾にやあ愛想が盡きるかえ。』

其四十五

『ようござんすよ、お富さん、自分で展りますから。』
讀みさしたる何やらの書物を燈の下に置きて、身を反りてお龍

はお富を見かへりつ、愛想も深く制止むれど

『でも御命令なんですもの、妾がしませんぢやあ……。マア其のまんまに御本を見て居らつしやいまし。

と此室の次室の長四疊に附ける押入より、お納戸絹の中型の二眼には美しき小二卷など軽げに取り出して、お富は今早速と手ばしこくお龍の爲に臥床を設くるなり

『あら、ほんとに不要つて云ふのにお富さん。お客さまぢやあ有りやあ仕いし、此様な妾なんか床の上下までお前さんたちに仕て貰つちやあ、それこそ罰が當つて冥利が竭きつちまふは。』

立上つて自ら爲さんとすれば、お富は笑を含み。

『お客さまぢやあ無くつても、でも、妾の妹だと思つて何でも御仕と、嚴く御命令になつて居るんですも。』
と云ひて、

『そりやあ其様でも妾あまたお前さん達と異ふ身分だとは思つて居や仕ないんだから、

と云ひく自ら上掛の衣被を搬び來れるお龍と共に、終に二三して展べ終りたり。

一風も吹いてや仕ないやうですがお寒い晩ですことネ。これぞ宜うございますか、御薄くは有りませんか知ら。

『い、え澤山ですよ。主人は。もうお就眠。』

『ハア、あなたにもお就眠つてお云ひつて。今しがた既。』

「然様。お春さんは。」

『まだ裁縫を仕てゐます。』

『なか／＼の人ネエー。』

『左様でございますとも、負けない氣の人ですよ。何でも妾にやあ負けたくないと思ひましてネ。』

ホ、、だが、あけすけで可愛らしい兒ネエ。

『さうですよ、些も毒は無い人で。ですから今日のお客さまの最初の様子にやあ何様なにか怒りましたらう。オホ、、そりやあ可笑いほどでしたよ。』

「然様」。そんなに最初は彼方で怒り立つてつん／＼仕て遣つて來た。」

「さうですとも。そりやあ甚い權幕でしたの。」

『それを何様して妨さんが直に彼様にへい／＼するやうに仕てお仕舞だつた。』

『そりやあ何ですもの。』

「何様したの。お前さん悉皆知つて、。」

『すつかり知つてます、斯様なんですよ。』

お富は諄々として始末を説き、お龍は黙々として一切を聞き終りたり。

其四十六

有りつる事のいろ／＼を語りて後、要も無き業したりと聊か二みてか、御就眠なさいましを最終の言葉にして、年齢に似合はずくすみて老けたるお富は靜に此室を去りぬ

階子を下りし音の彼方に消えてよりは、室毎々々の襖の隔てわれればにや、但しはお春も共に皆眠りに就きたればにや、微少な音響だに聞え來ず、風無き冬の夜の、戸外は定めし星斗燦然と霜の降る最中なるべし、天地死せるが如く靜にて、ただ流石大都の市中なれば、此家よりはや、離れたれど、凍てたる路に甲の走る轟きの、遠くより來りては復遠方に去るが斷えざるのみ、犬さへ鳴かず、穩やかに今宵は更けたるなり。

其故は主人ならでは知るものなけれど、樓上の此處には特と電燈を忌みてか其の設備あらずして、や、高き置洋燈のいと美しきを用ひたり。電燈はこれを細むることも之を太むることも油燈の如く自在にはあらで、點せば明る過ぎ、點さざれば全く暗く、如くものも無き春の朧夜の朧氣なる光を、時々的心任せに加減して趣致を取るやうなることの叶はねば、如何なる折にか面白からぬことの有るがためなるべし。お龍はやがて衣を更へ、枕頭の其燈を二えんとするまで細めて眠りに就きたり

燈火の光は朦朧と一室を籠めて、床間には軸を掛けず此のみを眺めと挿したる妙蓮寺山茶の、半咲きたるが一輪、咲かざるが一點、浮き出づるが如く白く見えたる他には何の心を惹くものも無し。お龍は此の瀟洒にして清らなる室の中に、柔らかなる美しき燈の光を浴び、穩やかに沈々と更くる夜を寢て、優しく幸福多かるべき夢に入らんとしたり。されど如何にしけん頓

には夢に入りかねて、一度二度寢返りして、不圖眼を開き見れば、我が頭の上に唯一羽の白き鷺の、羽を斂め頸を縮めて物思ふが如く、けろりと立ち居たり。夢にもあらず幻影にもあらず物の精にもあらず、此は是豫てより此樓に掛けられたる一面の額の畫なりしなり

鷺は夕暮の小閣きに立てるるり。燈火の光は弱々として其の暗さに同じきなり。畫には魂魄ありや鷺は今動き出さんとす。

其四十七

我が眼の彼を見つむれば、彼の眼もまたありくくと我を見詰めて、漸く此方に近づき來らんとする氣勢するに、お龍は思はず知らず慄然と仕たりしが、忽地にまた白ら笑つて、何の、燈火の工合にて浮出したるやうにこそ見ゆれ、不思議も更に無き^二通の繪なるをやと思へば、^二はまた凝然として畫の中に靜に立てるのみ。

思へば此の畫は古くより姉さんの有てる畫にて、幾年の前なりしか明らかならねど、我が猶年ゆかで遠慮氣も無く明暮に遊びに來ては姉さんに甘へし十幾歳の頃、如何なる折にか此の額を見て、姉さん此の繪は淋しくて不厭な繪なことネエ、と云ひしに、其様な事を御云ひで無い、此りやあお前の書いた繪ぢやあ無いか、と云はれて、調戲はれたりとは知らず、氣味の悪さ^二吃驚して顔の色を變へ、あ、悪い戲談を云つた、勘忍してお呉れ、ただ少し譯があつて妾が有つて居る此^二を可厭だつてお云ひだつたのが甚く可厭に聞えたものだから、詰らないことを云つてお前を吃驚させた、妾が悪かつた、と謝罪られ、慰められし記憶あり。其の時我が心直におちつきて、何、姉さんが好なのなら妾も好になるは、そして妾も眞似をして畫いてあげるはと云ひて、其の日筆を執つて見描しの覺束なくも、何様やら斯様やら似つこらしきものを書いて與へて、大に衰められ悦ばれしことありり。されど其の理由といふことは聞きもせず、間かんともせで、其儘に打過ぎ、それより後^二と無く此の繪を見、此の繪の下に寢たる事もありしが、氣にもかけず、心に^二止めず今日に至りしに、今宵はたま／＼夜の更けて稀らしく靜寂に、燈火の光りの朦朧したる工合の繪に映り合へるが上、^二

が心のさまざまの事を思ひて異しく冴えたるあまり、ふと我が眼につきて、我が思の此に牽かれしなるべし、此繪の昨日に^二口は何一つ異りたることもあらぬを、何時に無く鷺の動き出もするやうに思ひ做すも愚なることなりと思ひ消しつ、お龍は眠らんとして強ひて眼旺を合たり。

寝苦しきといふにはあらねど猶夢に入りかねて、ふとまた眼を開けば、鷺は薄き^二に動きて今や此方に歩まんとするな。

少し理由があつてわたしが有つて居る繪と慥に彼の時に姉さるの云ひたる理由とは何の理由なるべきか、彼の時はうつかり聞流して其の仔細を尋ねもせず、又その後は此の繪につきて一ト言の談話を仕たることもなければ、其の解らうやうは無けれど今思へば此の繪につきては何か深いわけの有りさうな心持のす

^三。姉さんは自分の過去話などをなさつた事は些少も無ければ、眼に看たるほかには我は何一つ知らねど、往時は一體どといふ徑路を経た人、此の繪にはまた何のやうな理由があるやら、妾の身にしても種々の過去がある、姉さんの往時にも何も無い事は有るまい、他の事は兎も角も此の繪に就いてだけども。あ、然し此の様な事をおもつても何の甲斐も無きことを、とお龍はいろくりに思へし末には心をなだらかにして、彼の^二の繪を何氣もなく見たり。

其四十八

幾度と無く此繪も見たりしが、心の中に物のありし時は、たが其に屈托して眼にも自然と着かず、また何事も無き時は氣にも止めず其儘に見て過たりし故にや、今まで幾年の間ただの及も、古き晴昔の事などを思ひ出したる折も無かりしに、今害は差當りて口惜しいといふ事も悲しいといふ事も又氣造こしいといふこともあるにはあらず、まして人には明かせぬ^二かしき思ひに胸の底を^二き^二りたきやうの心地するといふ事なんどの有るにもあらねど、さればとて又全く雲無き空のただ美しく青きやうに胸の中のさつぱりと乾淨なるにもらず、取り詰めて此を思ふといふ事も無けれど、何も彼も忘れ果て、物覚えぬ夢路に入るといふほどにもなりかねるより、偶然、眼の前の此の寫の繪などの心に留まりて、昨^二今日の事にもあらぬ古き記憶

の新に浮び現はれ來れるにや。お龍は猶忘れんとして其の覽を忘れ得かねたり。

「それにしても書問の姉さんの言葉は、妾が心を引立て、下さらうとからの戲談交りの其言には相違無けれど、餘り強過ぎて強過ぎて一々妾の耳には可厭に聞えてならざりしが、若し彼言がまあ姉さんの眞實の意からのことなら、姉さんは矢張静岡の叔母さんも同じことの人：りやあ智恵も有り餘るほど有り

同情も痒いところへ手の届く程有り、氣位も大■に違つて、何も彼も勝れてはお在なさるには相違無いけれども、種々のこ、が勝れて御在なさるだけに仰ある事も輪を掛けて、叔母はただ堅人を丈夫に有てといつたところを、姉さんは世を渡る伎倆のある毅然とした立派な漢子を擇つて配偶にしると御云ひになつただけで、心は矢張差違は有りは仕無い。まさかに姉さんの本心からとは思へぬけれども、全然意にも無いことを御云ひでは無かつた様子。一旦斯様いふ不幸な目を見て來た妾に、また男を有てと仰あつて、眞實に然様いふことを妾が唯々と云ひさうなやうに思つておいで、も有らうか知らん。あれほど能く何も彼も御解りの姉さんで、あれほど妾を可愛がつて下さる彼の姉さんで、そして現今ぢやあ此の廣い世界の中で妾に取つちやな叔母よりも誰よりも一番馴染の深い彼の姉さんが、よもや妾を其様なことを爲さうなものとは思つて御在ぢやあ有るまいと思つては居るけれど……。成程二度三度丈夫を有つ人も稀らしくは無いから、叔母の云ふのも世間普通では有らうし、不思議は無からうけれども、そりやあ他の人の話で、妾は妾の性分。妾の性分を知りきつて御在のあの姉さんが、妾も矢張他の人と同じやうに、時が経ちさへすりやあ又新規に男を有つものと思へて御在ぢやあ有るまい。そんな氣になれるやうな薄情な妾ならに、人に棄てられたからと云つて、彼様は口惜がない。姉さんは妾が何様な女だといふ事は知りきつてお在に違ひ無い。はれとも過日らの御談といひ、今日の御言葉といひ、何だか妾には可厭に聞えてなならぬ。若しや妾を矢張眞實に今後また男アも持ちさうなものに思つて御在のか知らん。まさか其様な事は有るまいが。いや／＼水野といふ人の事を幾度も御云ひで、然

も妾が其の人を何様かでも思つて居るやうに御取りのやうに問
えたあ、若し左様御取りのやうなら、其れあ働きのある男を
有てと御勧めなさるのも道理だけれども、何妾が彼の人を何様
の斯様のと思つて居やう。妾はただ彼の人を氣の請なと思つて
居るばかりで、妾なただ彼の人を嫌ひでは無いけれども、何ブ
妾に名淨で無い底心か有らうそりやあ妾は彼の人を好いて
は居るけれども、好いて居るばかりで何様の斯様のとは眞實に
思つては居ない眞個に妾は乾淨でない氣なんぞは微^二も有^一
ては居ない

其四十九

『妾は自分からは其様な女では無いと思つても居れ、人には矢
張り其様な女にも見えやう。成程其も化方の無い事ゆゑ、世間
の人の誰彼が妾の心を知つて呉れない其を^二惜しいとも情無^二
とも思ふでは無く、た叔母は彼の通りの木で造たやうの人
の事なれば、はじめから妾の心の分らぬも少しも無理とは思は
ず、解つて呉れなければとて情無いとも思はぬけれど、姉さん
だけは妾が何様な女だといふことを知り抜いて居て下さるとば
かり思つて居たに、矢張姉さんも妾を知つて下さらないかと^二
ふと、もう此の廣い世の中に眞實の妾の心持を知つて呉れる人
は一人も無いことかをつくづく情無くなる。もつとも惜い彼の
男に欺されたそもくの始から終局までの間は、始終姉さんに
遠ざかつて居て、何事も姉さんに隠して居た其は悪かつたなれ
と、後では羞かしい蹊蹟の何も彼も話して仕舞つてある故、猶
のこと妾の氣心も御わかりの筈なるに、水野さんの事について
何様の斯様のつて二度も三度も御云ひなすつたばかりか働きの
ある男を見せやうかの何のと、戯談には違ひないけれども可厭
な事を仰あつたのは、矢張妾の眞實のく心持が御解りが無い
からかと思はれる。年端のゆかない故でつい欺されたにしろ何
にしる、女の廢つて仕舞つた斯様な身の上でもつて、たとひ妾
が彼の人に迷つたからにしてが、何様まあ正直で清潔で純粹な
實意の深い水野さんのやうな彼様な人を、加之に横合から何様
することが出來やう。そんな汚い心持をもつて、のめくとし
た事を仕やうと爲もする女の様に妾が見えやうかと思ふと、餘

り情無くて味氣無くなつて仕舞ふ。しかし姉さんにさへ妾の心持がほんとは分らぬのなら、然様いふ不正直のが一體の世間の女の常なので、妾のやうなのは、よくくの馬鹿なのだらう。つい氣の毒と思ふ心が募つていろくくと水野さんの爲に頼みごとなんぞを仕たので、姉さんにまで可厭な事を云はれる。あ、これも妾が愚鈍過ぎるからの事で、もうくいつそ可厭になつて仕舞ふ姉さんに頼んだ事さへ治尾能く出来たなら、水野）

んの水の字ももう云ひ出さないで、當分は尋ねもすまい、曾も仕ますまい。何でも些少の日數の中に、姉さんが水野さんの事を御云ひなさるやうの調子が、急に異つて來たやうに思はれる。しかし、これも妾の僻見か知れぬけれど、何様も何かの譯かあつて、妾が水野さんに近よるのを御嫌ひなさり出したやこにも思はれる。此上も無い有り難い姉さんの所思が然様なら其ても無理に彼の人を何様の斯様のことと思つて居る併細のあるのでは無いし、妾が彼の人に遠ざかるのに別に苦も無い譯、妾は何處までも妨さんの指揮を受けて、何を修業するにしろ、何でも宜い一人立の出来る身になつて、ちやんと一人で過せるやゝになつてから、それから自分の勝手に水野さんの世話でも誰の世話でも、自分が親切にして遣りたいと思ふ人には親切にして遣りませう。彼の優しい智恵の深い氣の大きい姉さんでさへ妾の眞實の心持が解つて下さらないかも知れないのだから、一の外には眞實に味方は無い。然様思つては濟まない事ながら、此の繪の中の二が物を云つたなら、屹度姉さんの往時も分らけれど、姉さんもやつぱり辛いか悲しいかの瀬を越して、そして今のやうに一人立同様な身におなりに相違無い。そして此の鷺は其の因縁の紀念でもあらう。驚も物を云はず、姉さんも御話しぢやあ無いけれど、自分に比べて姉さんの往時をおもふとあ、何と無く朦朧と解るやうな氣がする。

お龍は眼を開いてまた彼の繪を見れば、纂はただ心も無く水に立ち盡して、爾我が心を知れりや、我は謎なり、と云はぬばかりに黙々たり寂々たり。

天うつ浪第三終

明治三十九年十二月二十九日印職

明治四十年一月一日_二行

實價八拾_二

京六日本ば丁玉_二_二

濱行

和田靜子

セ

印_二者中野鑛太郎

_二一

發衛所春陽堂

_二木同五一清

_二口陸一六一七

じ_二五

印刷所帝國印刷株式會社